日文研

2016年3月　no.56

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

日本人図（ファン･ノールト『世界一周紀行』フランス語版、アムステルダム、1610 年刊）

本図版は、オランダ人が日本人の姿を描いたものとしては最初の図版であり、世界一周に成功した最初のオランダ人で、海賊であったファン・ノールトがマニラ近くで拿捕した和船に乗っていた日本人乗組員を描写したスケッチを元に作成されたものであると考えられる。ファン・ノールトの旅行記を刊行した出版者に雇われた絵描き職人が日本人を実際に見ないで描いたにしては、かなりの写実性がある。着物を着た日本人たちは、丁髷を結い、刀を帯に差している。ある者は扇子を持っている。また、ある者は槍や弓、火縄銃を持っている。武装した日本人の誇り高い姿は、オランダ人読者にとって印象的なものであったに違いない。ファン・ノールトはこの時、日本の船を略奪せず、互いに贈物を交わした後に別れている。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインス准教授）

日文研

——エッセイ——

光田和伸　「専門官の時代」のことなど　2
石川　肇　アカデミック競馬エッセーの目指すところ　5
磯前順一　虚空を映し出す大きな瞳—一九七〇年代の沢田研二論　11
呉座勇一　共感の人物史　19
古川綾子　女優・浪花千栄子の関係資料　24
細川周平　松島詩子コレクションから見渡す戦前昭和の歌謡界　30
森　洋久　モンティ・ホール問題　35
李　応寿　私と日本演劇　44

——センター通信——

ジョン・ブリーン　*Japan Review* 三〇号をむかえて（その一）　50
阪口望み　感謝をこめて　52

共同研究　55
基礎領域研究　67
彙報　69
所員活動一覧　76

エッセイ

「専門官の時代」のことなど

光田和伸

退任まで残り百日と少し、そろそろ研究室を片付けなくてはと思いはじめた昨年一二月に、体調に次第に違和を覚えて、一六日に思い切って京都大学病院を受診した。気分だけは常のとおりで、バスと電車を乗り継いで行き、薬を貰って帰ってくるはずが、診察医のことばは「即刻、入院してください。命の危険があります。」だった。そのまま入院し、今日でまるまる二月になる。

この病棟には、御用納めの二日前の二六日に、新築オープン移転で移ってきた。白く明るく、ゆったりとしていて、常時、気温二三度（各自の好みで変更できる）、湿度三〇％に設定されている。窓のむこうに確かに冬至過ぎの日は輝き、木枯らしの鋭い音は聞いたのだが、この冬は冬を知らなかった。そして、ふしぎに頭が澄んでゆく思いがする。

日文研への着任は一九九五年の四月だが、その八年前の八七年八月に第一号の共同研究「日本文学の『私』」（翌八八年度四月に発足予定の中西進班）への参加を請われて以来のご縁だから、足掛け三〇年になる。私よりも古い方はもう井上章一さんだけである。

そのころの日文研にはまだ自前の建物がなく、洛西ニュータウン地区のセンタービル三階フロアを借り切り、そこを細かく仕切って、事務室と形ばかりの研究室が並んでいた。共同研究会は隣のエミナース（ホテル）の会議スペースを借りた。共同研究会の四年間に、昭和から平成となり、御陵大枝山町の建設用地が決まり、そしてバブルが崩壊し……という日々でもあった。日文研の建設用地の周囲はまるっきり売れ残って造成もされず、ゆるやかで広大な斜面のまま草が繁り、雲雀が囀り、雉が鳴くというありさまであった。

着任して翌年の一九九六年四月、資料課に専門官というポストが新設され西川慈子さんが京都大学附属図書館から転任して来られた。また、九九年四月には情報課にもできて、隈元榮子さんが京都大学大型計算機センターから着任された。どちらも、たまたま（ではなかったと今では推測しているが）女性であり、課長に准じるポストということで、ご挨拶にうかがうと、事務室の一番奥に、課長と専門官の机が二つ、横並びにならんでいた。内裏雛のようであった。この二人の方の働きは目ざましかった。日文研の今後に何が必要かを即断し主導し、てきぱきと手配した。予算も潤沢な時代だった。私が委員長としてお手伝いした事だけでも「宗田文庫」の受入れに伴う整理分類（資料課）、「連歌俳諧データベース」（勢田勝郭さんからの寄贈申し出の仲介と受入れ。情報課）がある。どちらのポストも任期五年で終了し、お二人は京都大学へ帰ってゆかれた。交替の新任者は無かった。日文研の創設期を振り返るとき、この二人の方の果たした役割はまことに大きかったと私は思う。西川さんはいまもお元気であるが、隈元さんは二〇一二年に逝去された。

常に判断し、たえず促進するひとが居なければ組織は動かない。「宗田文庫」の受入れに伴う整理分類にめどがついたころ、私は「古今東西・日本お天気データベース」（仮称）の受入

れを提案した。これは、三重県在住の方が、奈良時代の日本書紀から江戸時代末の日本各地の庶民の日記、随筆までを渉猟して、その天候の記載を集成したもので、データ化したうえで年月日別と地域、都市別の両面からアクセスできるソフトを開発すれば至便だと思ったのだが、予算の関係という理由で後まわしになり、そのまま沙汰止みになった。残念であった。また、私がこの「専門官の時代」に事務室から許可を得て日文研のあちこちに植えていた草花の写真は、花が咲くたびに情報課の職員の方が撮影して記録し、二五〇〇点に達したと聞いた。貴重な種類の花も多く、フリーソフトとして公開すれば意義はあると思うのだが、情報課のハードディスクのどこかに、今も眠っているのであろうか。

（国際日本文化研究センター准教授）

アカデミック競馬エッセーの目指すところ

石川　肇

受賞の連絡を受けたのは、日本中央競馬会（ＪＲＡ）の重賞レース「七夕賞」を待ち遠しく思っていた七月初旬のことだった。

「はじめまして、わたくし『週刊Ｇａｌｌｏｐ』の編集長で鈴木と申します。ギャロップエッセー大賞に石川さんの作品が選ばれましたので、そのご報告です。おめでとうございます」

『週刊Ｇａｌｌｏｐ』は競馬専門誌で、年に一度、競馬をテーマにした「エッセー大賞」の募集がある。競馬をこよなく愛するわたしは、友人の勧めもあってそれに応募していた。第一一回となる今回は一六九編の応募作があり、一次予選で一六編に絞られてのちの最終選考だった。審査員は吉川良（作家）・高橋源一郎（作家）・吉永みち子（作家）・北上次郎（文芸評論家）・井崎脩五郎（競馬評論家）ら競馬玄人の五人で、受賞作発表時には次のような選考過程が載っていた。

〈選考委員各氏の最も高く評価する作品が、まったく重ならないという異例の事態。議論も平行線をたどったため、過半数が受賞候補として挙げ、なおかつ1人以上は上位3番目以内に評価していた5作品に絞って、各氏その中から最上位を選び直すことになった。その結果、過半数の3人が票を投じた『舟橋聖一の愛馬命名と女たち』の大賞選出が決定〉

つまり五人のうち三人がわたしの、そして二人がＨさんの『旅打ち』に投じたので、まさに「鼻差」の受賞だった。しかしながら鼻差でも大賞には違いない（と、強がってみる）。また、

和尚という名をもつ中学時代のサッカー部の監督が「接戦の末の勝利こそ大事。大差の勝利より尊い」と語っていたのを思い出した。「俺は寺の息子だ」と言い張る彼の言葉はなんとなく胡散臭かったが、三〇年近く経った今も、わたしを励ましてくれるから面白い。

「石川さんは競走馬を所有している作家のエピソードをお書きになりましたが、そうした馬主文士を中心としたエッセーを、もっとお書きになるつもりはございませんか」

「え？」

「一〇月から連載をお願いしたいのですが、いかがでしょうか」

「本当ですか?!分量はどのくらいですか」

「原稿用紙にして六枚から七枚、雑誌の見開き分となります」

あまりにも突然のオファーで驚いたが、すぐに引き受けた。競馬専門誌における月刊誌の代表がＪＲＡの『優駿』とすれば、週刊誌は産経新聞社のこの雑誌で、競馬ファンとしてこれほど名誉なことはないからだ。

「馬が合う」という言葉はもともと乗馬用語で、馬と乗り手の呼吸がぴったり合っていることを指すが、鈴木さんはわたしにそれを感じてオファーをかけてくれたそうだ（本当にありがたい）。そして、そんな乗馬用語をさり気なく交えてくるあたりが彼のセンスで、連載に〈アカデミック競馬エッセー〉と見出しをつけてくれた。そして肝心のタイトルは悩みに悩んで『馬の文化手帖』としたが、これは日中比較文化研究で著名な劉建輝先生のアドバイスによる。それにエッセーごとの小タイトルを毎回つけて送り出しているが、編集部が掲載時に付した概要とともに、それを記しておこう。

◇『馬の文化手帖』二〇一五年度

第一回「競馬場外物語」

昭和の花形作家である舟橋聖一は日本の競馬小説の先駆者と目され、昭和二八年の秋の中山大障碍を勝つモモタロウの馬主としても知られる。今回は、舟橋が競馬を通じて親しくなった文豪・菊池寛と織りなした衝撃の「競馬場外」エピソードをお送りする。

第二回「馬の応援とご先祖様」

トキノミノルを「幻の馬」と称した作家・吉屋信子は馬主文士として知られ、足しげく競馬場へ通っていた。今回は舟橋聖一の目白御殿で一人娘美香子にお話しした吉屋と舟橋にまつわるエピソードをお送りする。

第三回「彼女に学ぶ競馬の歴史」

文士・舟橋聖一が著した競馬小説『遠い花』は、昭和二二年九月から翌二三年一二月に掲載された。今回はその主人公である満千子の言動から戦中戦後における競馬の変化の一端を読み解く。

第四回「馬産物語の誕生」

舟橋聖一が初めて手掛けた競馬小説『躍動』からは舟橋の競馬、馬産に対する考えが垣間見える。今回は舟橋聖一記念文庫におけるエピソードとともにこの名高い「馬産物語」の概要を紹介する。

第五回「大連競馬ミステリー」

昭和五年、『新青年』に掲載された『競馬会前夜』は大庭武年による日本初の競馬ミステリーである。大庭はなぜ競馬を題材にした探偵小説を、しかも当時のモダン都市・大連を舞台に描いたのだろうか。

第六回「スガタ牧場に見た夢」
柔道小説『姿三四郎』などで知られる作家・富田常雄は、のちに自らの牧場を開設するほど熱心な馬主文士だった。今回は筆者自身の競馬に関する青春時代のエピソードとともに富田が牧場を持つほどに懸けた競馬への愛情を読み解いていく。
第七回「当て馬」
舟橋の競馬体験をつづった日記にも登場する作家・片岡鉄兵は〈鉄兵さんに会うなら競馬場〉というほどの競馬好きだった。今回は片岡の代表作である『朱と緑』の一節から、今昔を問わぬ競馬と「男女の駆け引き」の相関に思いを巡らせる。
第八回「ユーモアに添い寝して」
舟橋とも親しかった人気作家・北杜夫の晩年の作品、『マンボウ　最後の大バクチ』の中に、競馬に関する記述がある。今回は、娘・由香とともに上山競馬場へ訪れた際のエッセーから文中に秘められた北から娘への感謝の気持ちを読み解く。
第九回「芸術は爆発だ」
岡本太郎は競馬に関するエッセーを残しており、その中に、競馬馬を擬人化した挿絵がある。岡本が人生で初めて描いたというその「漫画」は代表作・太陽の塔にも通ずる印象的な作品である。
第一〇回「ユリシーズの写真」
今年二〇一五年は文学や演劇そして競馬評論と幅広く活躍した、寺山修司の生誕八〇周年にあたる。寺山が「自分似たもの」と思い入れた愛馬ユリシーズは、まるで劇の脚本のようなきっかけから所有した競走馬だった。

第一一回「馬と妖怪」

「バカ」は今も昔もあまりいい意味では使われない言葉だが、馬鹿とかいて「ウマシカ」と読ませる妖怪がおり、先日亡くなった漫画家の水木しげるも描いていたという。そこで今回は、妖怪と馬の縁について話を広げてみたい。

第一二回「Ｓｈａｌｌ ｗｅダンス？」

二〇年ほど前に映画の影響で大ブームが起きた社交ダンスは昭和の文士たちも同様に楽しみ、作中にもよく登場した。今回は作者自身の〈苦々しい〉経験談を交え、ダンスと切り離せない恋のエピソードを紹介する。

第一三回「火花とびちる競馬かな」

歴史小説『敦煌』でも知られる芥川賞作家の井上靖に、その名も『鮎と競馬』という競馬がテーマの短編がある。その作中、抑制の効いた文中にちりばめた〈火花〉こそ「文壇きって

「ウマシカ」北斎季親作『化物尽絵巻』
（国際日本文化研究センター所蔵）

の紳士」井上の、小説作法と言えまいか。

連載は二〇一六年三月までの半年間、全二四回を予定しているが、それだけ続けると単行本一冊の分量になるそうだ。

「二四回続けて本にして馬事文化賞を狙いましょう」

「宮本輝の『優駿』が第一回目に受賞した、あれですか？」

「そうです、ＪＲＡの文化賞です」

「それはさすがに難しいですよ」

「いえいえ、文化・文学からの競馬エッセーなんてないですし、馬事資料としても貴重なものとなるのでいけますよ！」

わたしはこのおだてに乗ったわけだが（わかっていても面白そうだった）、賞に関することはともかく、エッセーの狙いが〈文化・文学からの〉にあったことは確かだ。それはさきに記した概要からもわかってもらえるだろう。馬や騎手そしてレースを中心とした競馬エッセーならわたしよりも適任者がいるし、日本文化・文学研究という視点から切り込むことで、「競馬文化の多様性」を表現したいと考えたのである。これが〈アカデミック競馬エッセー〉の目指すところである。

（国際日本文化研究センター機関研究員）

虚空を映し出す大きな瞳――一九七〇年代の沢田研二論

磯前順一

はじめ

二〇一二年度から二〇一四年度にかけて、日文研において共同研究会「昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析―ザ・タイガースの研究」を主催した。その成果として、ザ・タイガースの再結成にあわせて新書『ザ・タイガース　世界はボクらを待っていた』（集英社、二〇一三年）などを刊行したが、その関心はタイガースが活躍した一九六〇年代前半に主に注がれた。その時代は「昭和元禄」と呼ばれた高度経済成長期にあたり、ロック音楽を通した若者の反抗もまた希望に満ち溢れたものであった。しかし、学生運動の挫折などから、その後の時代主潮は一九七〇年代の「シラケ世代」へと移行していく。私がソロ歌手として活躍していた沢田研二に出会ったのもその時期であった。当時の私にとって、タイガースは失われた黄金期へのノスタルジアを誘う夢であり、沢田研二は乾いた同時代を生きる旗手であった。

そうした一九七〇年代の沢田研二について語る機会を得たのは、日文研の同僚である細川周平氏がディクス・ジョッキーをつとめるＫＢＳ京都のラジオ番組「レコ室からこんばんは」の二〇一四年三月三日分の放送であった。この番組はタイガースおよび沢田研二のファンの方たちの関心を少なからず呼んだが、周波数の関係から京都府外で聴くことの困難な幻の番組となった。以下、ホップ・スターとしての表現者、沢田研二の魅力をめぐる細川氏と磯前の対話

の部分を文字に起こして紹介することにしたい。

番組より

【細川周平】今聴いているのは沢田研二のＬＰ『比叡山フリーコンサート』、一九七五年七月二〇日、比叡山のスキー場でのコンサート二枚組ですね。一曲目はこれから「夢のつづき」を磯前さんにリクエストしていただきました。沢田研二作詞でミッキー吉野作曲ということですが、このコンサートのころのジュリーについて、少し話してもらえますか。

【磯前順一】私は中学生だったんですよね。ちょうどこれは、沢田さんが「危険な二人」とか「追憶」という一つのピークを迎えた時期に出したものですね。沢田さんがたぐいまれな美青年と言われ、すばらしい歌声で。バンドは井上堯之バンドとミッキー吉野グループ、後のゴダイゴですよね。このバンドがバックアップして、音として

も声としても本当にひとつの絶頂をなすアルバムだと思います。このコンサートの頃、彼は『悪魔のようなあいつ』という三億円犯人の主演テレビをやっていたんですね、久世光彦さんの脚本で。「時の過ぎゆくままに」を歌いながら、長髪で細身の姿で、見た目にも本当に素晴しいポップシンガーという感じでしたね。

【細川】二曲目はビージーズの「トゥ・ラブ・サンバディ」。レゲエのアレンジでしたね。一九七五年でレゲエというと、相当とんがっているという感じですか。レゲエは、「太陽を盗んだ男」の中でも歌われているそうですね。

【磯前】沢田研二さん主演の「太陽を盗んだ男」で、原爆が完成したと言って、ボブ・マーレーの曲で踊るという印象的なシーンがあるんです。私はあの映画を見て、沢田研二はなんて大きな空虚さを心に抱えていて生きているんだけれど、それが原爆を持つことで自分に生きる意味を与えるようとしているところに強い衝撃を受けたんです。ちょうど七〇年代の半ば、シラケ世代を象徴するジュリーやショーケンというＰＹＧ出身の二大ボーカルが時代の空気を見事に体現していた時期ですよね、その彼らがシラケ世代の空虚さをどうやって埋めるのか、どうやって心の空虚さに立ち向かうんだろう。そうしたファンの思いを投影させるようなキャラクターが、この比叡山コンサートから『太陽を盗んだ男』にかけて、沢田研二が確立していったものだったと思いますね。

【細川】ＡＴＧの映画だと、桃井かおりとか石橋蓮司というのも、僕はちょっと思いつくんですけどね。

【磯前】桃井かおりといえば、萩原健一と『青春の蹉跌』を七〇年代冒頭に作りましたね。その映画音楽が、ジュリーのバックバンドを勤めた井上堯之さんなんですよね。ジュリー、

ショーケン、井上堯之、こういう人たちが青春の空虚さ、七〇年代のポストＧＳの「どういうふうに自分たちは生きたらいいの」という空虚さを、彼らの映画やこの比叡山コンサートではうまく表現されていたような気がしますね。

【細川】三曲目はちょっとそれに関連する詞になるのかな。ジュリーが作詞をして、元スパイダースの大野克夫が作曲をした「残された時間」、この中で歌詞がすごくいいんですよね。「考えているより、歩き出したほうがいいということだけは、僕たちはわかるよ。たとえそれが命とかけっこだとしても、青春はひたすらに生きることさ」――これをジュリーが七四～七五年につくって歌っているわけですが、今、磯前さんのシラケ世代の話を聞いていると、この歌詞がものすごくぴんときますね。

【磯前】ジュリーがすごいのは、「大きな目が虚無を映し出す」とよく言われていましたけど、ただシラケているんじゃなくて、それを超えていく情熱を、歌とかそういうものを信じることで、シラケているものを一生懸命生きて超えていくというメッセージを、歌やお芝居に向かう姿勢から自然と発していた点だと思うんです。だから子供だった私にさえ、沢田さんがすごく輝いて見えたのだと思います。

【細川】この次に聴いてもらうのは、「花・太陽・雨」ですけれど、これはどういう由来なんですか。

【磯前】「花・太陽・雨」は、ここのギターをやっている井上堯之さんとキーボードの大野克夫さんというスパイダースと、タイガースから沢田、岸部の二名が加わって、ショーケンたちと一緒にやったＧＳのスーパーバンドですね。そのファーストアルバムで、私はこれを聴いたときにとてつもない衝撃を受けたんです。程なくして、井上さんが「これはアルベール・カミュ

の『異邦人』をモチーフにつくったんだ」とコメントしたのを聞きました。さっきのシラケ世代と関係するんでしょうけど、ここで歌っている「喜びのときに笑えない」とか、自分のむなしい人生をどうやって満たしたらいいんだ、そこに花とか太陽とか雨という恋人の愛情が入ってきて光が差し込むという歌で、カミュの不条理の世界を超えて、何か生きる意味を探そうという、すごい肯定的な歌だったと思いますね。

【細川】確かに、曲名で「花がいっぱい」だの、「太陽がさんさん」だの、そういう歌謡曲、GS曲は思いつくけど、三題くっつけちゃって、何ていうか、文章にしないで並べちゃうというのは、やっぱり特別な作詞法だね。岸部修三、現在の岸部一徳の歌詞ですね。

【磯前】これは、色のない世界に花が咲く、何もない世界に太陽が輝く、乾いた土地に雨が降る、そういう意味のない世界に意味をもたらしてくれるのがあなたの愛だという歌で、そのもとになったアイデアを井上堯之さんが持っていて、彼は伝記の中で「ずっと自分が生きることってむなしくて、苦しくて、スパイダースやってもむなしかった。音楽やっても意味がなかった。そこを音楽を通してぶつけてみようということでつくった」と言うんですね。そのときに沢田研二に出会って、「沢田というのは一生懸命とにかくやる、何でも一生懸命やる。それは、エンターテインメントでも芸能界でもコントでも、何でもやる。歌もやる。そういうやることに意味を見つけようとしている沢田にこの歌を歌わせたい」と、井上さんは感じていたみたいなんですね。

【細川】空っぽということで、ジャックス、六八年か六九年にグループサウンズとしてデビューしたら、その次のニューロックの人たちに支持され、今も非常にファンは広い。ジャックスが「からっぽの世界」というのを歌っていますね。早川義夫、今も活動していますけれども、彼

の場合も「からっぽの世界」で閉じていて、雨とか潤いということは一切ない世界ですね。それが、沢田研二なり岸部修三の世界、あるいは井上堯之だと、そこに何か力をもたらしてくれるというわけなのか。なるほど。

【磯前】それがちょっとＧＳっぽいと言えば、救いがある分ＧＳっぽいし、早川義夫のように救いがないから救われる人たちもたくさんいるんですけど、沢田研二や岸部修三が描いたのは、そこに色が入ってきて、雨が潤って、救いが。おそらくそれが、ＰＹＧを聴いた男性聴衆にはきれい過ぎちゃうし、ＧＳ時代からの女性ファンはいささか観念的過ぎたでしょうね。

【細川】難解と言えば難解じゃないですか。その前のＧＳのダンス・ナンバー、シーサイドバンドだとか、いわゆる踊ってキャアキャアしているファンにとっては、ＰＹＧというのはどうなんですか。

【磯前】これは、ベスト三〇に入ったか入らないぐらいですから、見事にセールスとしては大こけしたんですよね。今おっしゃったように、まさに難解過ぎた音だったんですよ。でも、比叡山コンサートで私が子供心に感じたのは、沢田研二の意地だったんですよね。ＰＹＧは成功しなかったけど。そして、この比叡山コンサートで、「危険なふたり」とか「追憶」で当たりに当たっている沢田研二は、ＰＹＧを歌わなくてもよかったんですよね。でも、あえてＰＹＧをここにもってきた。自分たちのやりたかったのはこれなんだよ、今も変わらないんだよというふうに。彼のすごい熱いものを感じましたね。「ただのアイドルじゃないんだ、この人は」と思いましたね。

【細川】では次に、この二枚組のアルバムの一番最後に歌われている「叫び」というのをリクエストしてきましたけれども、この曲の由来をお願いします。

【磯前】比叡山コンサートのアンコールでしたね。一度バンドが引っ込んで、沢田さん一人だけがギターを片手に出て、自分で弾き語りをして歌うという印象的な風景でした。デヴィッド・ボウイが「自分はいつかステージの上で殺されたい」とスターとしての覚悟を歌っていましたけど、それを思い出させるような沢田さんの歌詞で、「歌いたい自分のために、声がかれるまで」、そして「いつか歌を枕に死にたい」というんですよね。それを聴いて、沢田研二の歌手としての覚悟というんですか、自分は表現者なんだ、歌を歌うということに人生を見つけて、そして人生はそれで終わると、この人って、歌うということに生きることそのものの意味を見出しているんだな。それが理屈じゃなくて、一人ぼっちの弾き語りの演奏の中に見事に体現させていたのが凄い印象でしたね。だからでしょうかね、私は沢田さんのライブ・レコードの中ではこの歌が一番好きなんです。

【細川】どんな歌詞か、少し読んでもらえますか。

【磯前】「振り返ることは好きじゃないから、ただあしたのことを思って生きよう。みんなにしてあげることはひとつも見つからないけれど、歌なら歌える」「歌いたい自分のために、歌いたい声がかれるまで。死にたい、いつか舞台で、死にたい、歌を枕にして」――こういう歌詞なんですね。私は子供でしたけど、これを聴いたときに、自分も何か表現できるものを人生の中でつかみたいと思ったんですよ。実際にはその後一五年ぐらいたって三〇歳前後になってから、物書きになろう、そのために大学院で勉強しようと思うようになるんですれどね。これを聴いたときに、子供ながら、やっぱり何かに賭けて自分で意味を見つけていく、それが表現という行為なんだろうと、漠然たる思いながらも強い衝撃を受けたんです。その表現行為が音楽なのか、物を書くことなのかは、まだ子供だったから何だかは分からなかったですけれど。で

も、そうしたことを考えさせてくれた稀有な機会だったですね。おそらく、このときのコンサートのために沢田さんが用意した曲だったんじゃないのかな。このコンサートは沢田研二にとっても特別な時間、ファンへの贈り物であり、彼自身の中でも大きな道標をなすものだったと思っています。

おわり

今どれだけの学者が自分の学問が社会の不公正さを糾すために役立っていると信じているのだろうか。生活の糧を得るためという理由のもとに、どれほどこうした生活を続けていったらよいのか、経済的に潤っていたにせよ、暗澹たる気持ちになっている研究者が大半なのではないのだろうか。もはや学問の真理を信じられない状態は、かつて沢田研二あるいは萩原健一が活躍した一九七〇年代のシラケ世代に共通するようにも見える。

しかし、かつてのシラケ世代がそうした真理の喪失を恥じる気持ちを意識化して、言葉にしていたのに比べると、今の社会状況はそうした真理の喪失状況そのものを認めず、みんなでよってたかって存在していないかのように否認しているようも思える。だとすれば、かつてのシラケ世代がジュリーやショーケンという時代の旗手を生み出したように、何か文化的あるいは思想的な象徴を作り出すのはきわめて困難な状況にあるように感じている。こうした危険な状況だからこそ、沢田研二という歌手に軌跡に今改めて着目していきたいと考えている。少なくとも、彼が表現という行為に一身を賭した真摯さを学ぶことは、その成果は別として私でも出来ることだろう。

（国際日本文化研究センター教授）

共感の人物史

呉座勇一

最近、パーティーなどに出かける機会が増えた。そこで研究者以外の方と知り合って、日本史を研究していると話すと、必ずと言っていいほど「好きな歴史上の人物は誰ですか？」と尋ねられる。気軽に問うているのだろうが、答える側の立場を想像していただくと、意外と厄介なことに気づくだろう。「織田信長が好きです」「坂本龍馬を尊敬しています」では月並みだし、逆にマニアックな人物を挙げても、相手が知らないから話がはずまない。だが、それ以前に私は特定の歴史上の人物にあまり思い入れがないのである。これは私のドライな性格にもよるのだろうが、「好きな歴史上の人物、特になし」という同業者は少なからずいるのではないか。

一般の方のイメージでは、歴史研究者は歴史上の偉人を研究しているのだろう。誰かを研究しているはずだと思っているから、「誰が好きですか」という質問をするのである。しかし、歴史学は必ずしも個人に注目して研究する学問ではない。むしろ近代歴史学は、そういった"英雄史観"を否定するところから出発した。日本最初の歴史学会である史学会の初代会長に就任した重野安繹（一八二七～一九一〇）は明治二二年（一八八九）、設立総会の講演「史学に従事する者は其心至公至平ならざるべからず」において、歴史研究と道徳教育の分離を提唱し、旧来の英雄中心の歴史像を批判している。

重野は言う。忠臣義士と讃えられている人物にも多少の過ちはあるし、乱臣賊子とけなされ

ている者にも少しは良いところがある。だが歴史を道徳に利用したいという思惑が入り込むと、忠臣の欠点や乱臣の美点を捨象して、勧善懲悪の物語に単純化してしまいがちである。これは事実を曲げて人を欺く行為に他ならず、客観公平な態度とは言えない。歴史的事実を明らかにし、それをありのままに伝えてこそ、真の教育の基礎となるのである、と。重野が近代日本における実証史学の祖と評価されるゆえんである。

重野は軍記物『太平記』中で南朝の忠臣として活躍する児島高徳を、『太平記』作者の小島法師が創作した架空の人物であると説いたり、『太平記』の名場面として知られる楠木正成・正行父子の「桜井の別れ」を「拵話」と断言したりしたため、「抹殺博士」の異名をとった。ここから分かるように、伝説・逸話・美談の史実性を疑う実証史学は、個人の英雄的活躍を否定する傾向を持っていたのである。

重野と共に帝国大学文科大学の国史科設立時の教授をつとめた久米邦武（一八三九～一九三一）は、明治二三年（一八九〇）に「英雄は公衆の奴隷」という論文を発表した。久米は、英雄の事業の成否は公衆の意思に左右されると述べ、〝英雄史観〟と決別した。福沢諭吉（一八三五～一九〇一）や田口卯吉（一八五五～一九〇五）ら文明史家も、英雄よりも時代・社会を重視する姿勢を打ち出しており、英雄崇拝の排除という問題意識は正史編纂を担う官の世界の専有物ではなく、国民一人ひとりの自立を願う多くの近代的知識人に共有されていたのである。

いわゆる久米邦武筆禍事件により、明治二五年（一八九二）に久米は帝国大学を去り、翌年には帝国大学史誌編纂掛が廃止され、重野は史誌編纂委員長の職を解かれた。以後、新たに設置された史料編纂掛（のちの史料編纂所）を中心とする官学アカデミズムは世間の物議をかも

す大胆な新説提起を避け、史料の基礎的研究・考証に徹するようになった。当然、歴史上の人物への踏み込んだ評価はなされなかった。

実証史学のつまらなさは、人物史の欠如に起因すると見られることが多い。実際、「学問の中の最も乾燥無味にして最も倦み易きものは歴史学なるべし」とアカデミズム史学を指弾した在野の歴史家である山路愛山（一八六五～一九一七）は、『足利尊氏』『豊太閤』『源頼朝』『西郷隆盛』などの英雄伝を次々と発表した。これは、「時勢は人を作るものなれども、人もまた時勢を作るものなり。歴史家の眼中は決して人物を脱すべからざるなり」という彼の信念に基づくものであった。

また、客観的・科学的と称して個別実証に終始する実証史学を「無味乾燥なる履歴書の考証」と一蹴し皇国史観を主導した平泉澄（一八九五～一九八四）は、南朝の忠臣を積極的に顕彰した。「百姓に歴史がありますか。豚に歴史がありますか」という彼の有名な発言が象徴するように、平泉の歴史観は優れた人格を有する英雄・偉人の事跡を中心に据えるものであった。歴史は「科学よりはむしろ芸術である」と言ってのけた平泉の研究姿勢は、今日の歴史学界においては専ら反面教師となっているが、彼が語る英雄譚が当時、多くの人を魅了したこともまた事実である。その意味で平泉の皇国史観は近代史学の鬼子ではなく、実証史学発達の反作用として必然的に登場したものである。

英雄伝・偉人伝は子どもでも楽しめるし、道徳教育の観点からも有用である。面白く「社会的意義」のある歴史を手っ取り早く実現しようとすると、人物史、それも英雄伝・偉人伝に傾きがちである。その意味で平泉の皇国史観は近代史学の鬼子ではなく、実証史学発達の反作用として必然的に登場したものである。

戦後の歴史学はマルクス主義が主流となり、「歴史は民衆がつくる」という視角が徹底された。加えて、皇国史観が日本を誤らせたという反省から、歴史学界では英雄伝を忌避する傾向が生まれた。かくして人物史の冬の時代が訪れたのである。右派に言わせれば、「名も個性もないノッペラボーな「人民」や「民衆」」しか登場しない、英雄不在の退屈な「歴史科学」だ。

けれどもマルクス主義歴史学が衰退した現在の日本史学界においても、人物史は流行っていない。若者の興味を惹くべく人物史の復権を唱える史料編纂所教授の本郷和人氏（一九六〇～）は、人物史停滞の要因として、皇国史観アレルギーの残存を指摘する（『人物を読む日本中世史』講談社、二〇〇六年）。確かに藤岡信勝氏（一九四三～）を代表とする自由主義史観研究会が刊行した『教科書が教えない歴史』（産経新聞ニュースサービス、一九九六～一九九九年）も偉人伝の色彩が濃く、ナショナリズムと人物史の親和性は高いと言えよう。だが私はイデオロギー的な問題ではないと思う。前述したように、近代歴史学の黎明期である明治時代から〝英雄史観〟を忌避する風潮が見られる。歴史学と人物史の根本的な緊張関係こそが問題の核心ではないだろうか。

中世史家の亀田俊和氏（一九七三～）は、歴史上の人物をテーマに卒業論文を書きたいと指導教員に訴えたところ、「まずは実証的な研究をしっかり成し遂げてからにしなさい」と諭されたという（『高師直』吉川弘文館、二〇一五年）。これはおそらく亀田氏に限ったことではなく、卒論で人物史をやりたいと言って却下された人は少なくないはずだ。吉川弘文館の人物叢書が典型的だが、伝記・評伝の類は功成り名遂げた大家によって執筆されるべきである、というのが学界の不文律だろう。そこには「実証的に優れた人物史を書くのは難しい」という認識が垣間見える。

重野が指摘したように、どんなに偉大な英雄であっても詳しく調べていけば、短所は見つかる。細かい瑕瑾を数多く発見することが実証性の証でもあるため、伝記を書く歴史家はついついそこに注力してしまう。結果、その人物の英雄性は薄められ、「無味乾燥なる履歴書」ができあがるわけだ。それどころか、「本当に英雄だったのか」「作られた英雄ではないか」といった話になることすらある。精密に研究すればするほど、個人の力の限界が見えてくる。歴史を動かすのは組織の力であると思い至り、組織の分析を進めるようになり、人物史から離れていく。しかしながら、その努力は必ずしも人々から支持されないのである。

一例を挙げれば、近年の織田信長研究は、織田信長の革新性を否定する方向に進んでいる。信長の諸政策は他の戦国大名のそれと大差なく、彼の政治思想は朝廷や幕府を尊重する保守的なものだったというのだ。そして成功の理由を織田信長の個性に求めるのではなく、「織田政権」の構造から信長の躍進を説明しようとしている。ところが、それではお客様は納得しないのである。「信長神話を暴く！　真実はこうだ!!」といった本を意欲的・刺激的とほめてくれるのは「上級者」だけで、一般の読者は革命児信長の天才的閃きを見たいのだ。当たり前のことだが、司馬遼太郎作品はサービス精神に富んだエンターテインメントだから高い人気を誇っているのであって、人物に焦点を当てて歴史を語りさえすればいいというものではない。

ここに人物史の難しさがある。実証性を高めると、既存の英雄像を崩してしまい、日本史に親しんでもらうという目的を果たせない。かといって記述の正確さより娯楽性を追求するのであれば、歴史小説で十分ということになり、歴史家の存在意義は失われる。これは重野以来の難題だが、本郷氏はこの点に関する明確な解答を用意していないように思われる。私にも名案はないが、まずは英雄頼みの人物史から脱却する必要があると考えている。

史実を軽視して英雄忠臣を美化する平泉流の人物史の問題点は言うまでもないが、「英雄の実像」を描き出す人物史も、歴史学者が期待するほどには世間に受けない。「英雄と言われてきたけど、実はそうでもないんだよ」というスタンスがネガティヴに映るからだろう。ならば、信長や龍馬といった有名人ではなく、無名の人物に光を当てていくべきではないだろうか。ベストセラーになった磯田道史氏（一九七〇～）の『武士の家計簿―「加賀藩御算用者」の幕末維新』（新潮社、二〇〇三年）の主人公、猪山直之は全く無名の存在であり、英雄的なところがまるでない。しかし、彼の実直さ、懸命さは多くの読者の心を打った。私たちと同じ平凡な人間の等身大の生き方が、そこにあったからである。

昔ながらの「畏敬の人物史」だけでなく、こうした「共感の人物史」がもっとあってもいいと思う。そして、無名の人物を発掘することにかけては、歴史学者は歴史小説家に後れを取ることはないと私は思うのだが、いかがであろうか。

（東京大学大学院学術研究員／国際日本文化研究センター客員准教授）

女優・浪花千栄子の関係資料

古川　綾子

昨年末、一九七三年に亡くなられた女優・浪花千栄子さんの関係資料を思いがけず譲り受け

ることになった。

この一〇年ほど古書店などで浪花千栄子に関係する資料をなんとなく探していた。インタビューの掲載誌や出演作のＶＨＳテープやパンフレットをとりあえず購入しておくだけのいい加減な探し方だが、関係者でなくても収集できる資料はある程度集まっていた。ただ、できることなら確認したいと思っていた写真は一枚も見つけられずにいた。出演した映画やテレビドラマのスチール写真は古本屋にもあり、ＮＨＫ大阪放送局が保管するラジオドラマ「お父さんはお人好し」関係の写真はかなり残っており見せていただけたが、一九六五年に出版された自伝『水のように』（六芸書房）の巻頭二七頁に及ぶ口絵写真五九枚に含まれる幼少期の写真や松竹家庭劇に入団する以前の香住千栄子時代の写真、自宅兼料亭「竹生」でのオフショットなど、残っているのであれば見てみたい写真と一致するものはなかった。

秋から日文研に勤務すると決まった時、「竹生」があった嵐山に近い職場に通うことになったのだから、いい加減ではない探し方に切り替え、「竹生」のことも調べ直して、松竹家庭劇・松竹新喜劇時代の浪花千栄子について考察しておきたいと思った。その矢先、「竹生」に保管されていた写真六五九枚と雑誌の切り抜き一七点（合計六七六点）をほぼ初対面の方から譲り受けた。大阪府立上方演芸資料館で学芸員をしていた一四年間にも何度か経験したことだが、探していると見つけられず、諦めたり視点を切り替えるとひょっこり目の前に現れる、資料収集の不思議な展開に感謝している。

昭和三〇年代から四〇年代にかけて、浪花千栄子が関西を舞台にした映画やドラマに欠かせない女優だったことは知られているが、それ以前の二〇年間は、松竹新喜劇（一九二八年から一九四六年までは松竹新喜劇の前身の松竹家庭劇）の看板女優として活躍していたこと、松竹

新喜劇の看板女優ということは上方喜劇界における女優の草分け的存在を意味することはあまり知られていない。日本の喜劇の歴史は、一九〇四年二月に大阪の道頓堀・浪花座で元歌舞伎役者の曾我廼家五郎と十郎が曾我廼家兄弟劇を旗揚げしたことに始まる。一九一四年に五郎と十郎は袂を分かち、天性の喜劇役者といわれた十郎と、名脚本家兼プロデューサーとして手腕を発揮した五郎は、それぞれが劇団を率いて競い合うことで喜劇を発展させた。一九二五年に十郎が病没すると、五郎は「日本の喜劇王」と呼ばれるようになり、一九四八年に亡くなるまで喜劇界に大きな影響を及ぼした。歌舞伎出身の曾我廼家五郎は女形にこだわり最後まで女優を起用しなかったが、曾我廼家五郎劇に対抗させるために松竹が二代目渋谷天外と曾我廼家十吾に要請して結成された松竹家庭劇では、当初から松竹所属の女優が舞台に立ち、石河薫や浪花千栄子などの実力派女優は男優と同じように看板スターとして扱われた。

浪花千栄子は一九三〇年に松竹家庭劇に入団して間もなく天外と結婚しており、看板女優として座長の妻として劇団と天外を二〇年間支えたが、一九五〇年に天外から恋人の妊娠を理由に離婚を迫られて、劇団に残ることも許されず、家庭と仕事を失い、大阪を離れて京都の知人宅に身を隠した。劇団にとっても浪花の脱退は痛手であり、天外は批判にさらされるが、翌年一一月に道頓堀・中座で初演した「桂春団治」が評判を呼び、脚本家渋谷天外の名を一気に高めることに成功した。従来の勧善懲悪を基本とする曾我廼家劇とは一線を画する新しい「文芸的」な喜劇だと劇評家に絶賛され、この作品を契機に松竹新喜劇は全国展開していく。

そんな中、浪花千栄子の松竹新喜劇退団を喜んだであろう人物がいた。当時、吉本興業で唯一人の専属芸人として戦前同様に活躍していた花菱アチャコである。現在では松竹と吉本の芸人が同じ舞台に立つことはめずらしくないが、一九三九年に松竹の傍系会社・新興キネマ演芸

部が吉本で一、二を争う人気漫才師のミスワカナ・玉松一郎を引き抜いたことから激しい対立が始まった。一九四二年に新興キネマは解散して、吉本も戦火で寄席を失い、アチャコしか芸人がいないという状況になっても、松竹と吉本の芸人が共演する機会はごく限られていた。まして浪花千栄子は松竹新喜劇の看板スターだった。

花菱アチャコは一九三〇年から四年間、横山エンタツとコンビを組み、現在のような会話中心の近代漫才のスタイルを確立したのち、別のコンビを経て、戦後は一人でコメディアンとして活動していた。一九五一年秋、ＮＨＫ大阪放送局から翌年一月開始のラジオドラマの主演を依頼された際、大阪弁が普通に話せて、自分のアドリブに当意即妙な対応ができる相手役として、松竹新喜劇を退団した浪花千栄子を起用してほしいと強く主張した。誰にも居場所を告げずに消えた彼女を見つけることは容易でなかったが、銭湯通いが一般的だった時代、担当プロデューサーは彼女の通っていた銭湯を探し出し、アチャコの思いを伝えて浪花千栄子を表舞台に連れ戻すことに成功した。

アチャコの目論見通り、浪花の自然でやわらかい響きの大阪弁は、それまでのラジオで流れていた漫才で使う、強い言葉や口調を前面に押し出した大阪弁と違って、アットホームなラジオドラマにふさわしいものだった。「アチャコ青春手帳」（一九五二年一月～一九五四年四月）ではアチャコの母親役を、続く「お父さんはお人好し」ではアチャコと夫婦を演じて好評を博した。一九五四年一二月から一九六五年三月まで、「お父さんはお人好し」の放送回数は五〇〇回を数え、長寿番組として放送史に記録されている。浪花の言葉は「なまり」があり本来の大阪弁ではないと指摘されることもあったが、ラジオの影響により、浪花の話す大阪弁こそが上品で理想的な大阪弁だとマスコミに取り上げられるようになるまでに時間はかからな

かった。

その傍ら、一九七三年に亡くなるまでの約二〇年間に二一六本の映画に出演しており、溝口健二監督作品「祇園囃子」（一九五三年）ではブルーリボン助演女優賞に輝いた。船場の気丈な女主人から下品な老婆まで幅広い役をこなした浪花は、雑誌のインタビューで自分の演技について、松竹新喜劇時代の鍛錬の賜物だと説明している。喜劇ならではのアドリブはもちろん、座長の妻である以上、看板スターでも自分がいつも主演だとほかの女優に示しがつかないので、誰もやりたがらない老け役や汚れ役を率先して演じなければならず、結果的に様々な役を演じる上で勉強になったと自伝にも書き残している。

女優として成功の兆しが見えた一九五三年には嵐山の天龍寺近くに一八〇坪の土地を購入して、女優を引退してから生活に困らないようにとの考えから、自宅を兼ねた料亭「竹生」を開業した。浪花の人気と知名度の高まりとともに、「竹生」の経営も軌道に乗り、六〇代後半を迎えても女優として多忙な日々を送っていたが、夜に「疲れた」と言って床に入り、そのまま目覚めることなく、一九七三年一二月二二日に六六歳で急逝した。

さて、冒頭の話に戻りたい。写真と切り抜きを譲ってくださった方は大阪府箕面市在住の女性である。昨年九月下旬、箕面市公民館のシニア市民講座で上方喜劇について話す機会を得て、普段であれば藤山寛美やミヤコ蝶々のような、より知名度が高い人を取り上げるのだが、日文研での勤務が決まり浪花千栄子のことが気になっていたので、彼女と松竹新喜劇について話をさせていただいた。それから三ヵ月経った一二月下旬、箕面市の講座の担当者の方から、講演を聴いておられた方が浪花千栄子さんの資料を保管しておられ、必要でしたら差し上げたい、不要ならそのまま破棄してもらって構わないと言っておられるが、どうしますかと連絡を

いただいた。ともかく所有者の方に連絡させていただきたいと伝えたところ、先方としては役に立つような写真かどうかわからないので写真を見てから説明したいと言っておられるとのことで、担当者の方が仲介してくださり、一二月二五日の午前中着の宅急便で自宅に資料を送っていただいた。

小脇に抱えられるほどの箱にびっしり詰まった資料が届き、すぐに電話で連絡をとらせていただいた。どんな経緯で保管されていたのか、もしかしてご親戚なのだろうかなど、失礼ながら期待が高まっていたのだが、お話は全く違う、切ないものだった。女性の甥御さんが二〇数年前に嵐山で観光用人力車の車夫の仕事をされていた時、解体工事中の邸宅の前の道を通りかかったら、「この写真、捨てるんやけど、誰かいらんかな」と解体工事中の作業員の方に話しかけられて、見てみると古い女優さんの写真だとわかったのでこういうものが好きな叔母さんに見せてあげようと思い、その場で貰ったものだという。浪花千栄子没後の「竹生」については明らかでないことも多く、これまでに「お父さんはお人好し」のプロデューサーや花菱アチャコの関係者から話を聴いたところ、ご家族はいまも不自由なく生活しておられると思うが、「竹生」はいつの間にか閉店して取り壊され、ご家族と連絡もとれなくなってしまったとのことだった。

解体作業中に出てきた写真を見て、そのまま破棄するのは忍びないと思われたのだろうか、通りかかった人力車夫の青年に託された資料が箕面市の女性の元へ届き、二〇数年の時を経て、私の目の前に現れた。映画やドラマの撮影風景や、大阪と東京にあった後援会の集合写真や、贅をつくした「竹生」の庭園で撮影された雑誌の取材写真など、仕事関係とプライベートの写真が入り交じっており、自伝の口絵写真に使われた九枚も確認できた。浪花千栄子の足跡

をたどることで上方喜劇における女優の系譜を明らかにしたいと考える私には願ってもない貴重な資料であり、早く公開できるようにしたいと考えている。

（国際日本文化研究センター特任助教）

松島詩子コレクションから見渡す戦前昭和の歌謡界

細川周平

昭和一〇年代から二〇年代にかけて人気の女性歌手に松島詩子（一九〇五年山口県柳井生まれ～一九九一年東京没）がいる。戦前の「夕べ仄かに」「マロニエの木蔭」、戦後の「喫茶店の片隅で」「スペインの恋唄」などが懐メロ好きに愛されている。上品なたたずまいと歌い方は忠実なファンを集め、数年前、彼女のタンゴ、シャンソン、歌謡曲が一枚のCD『ラ・タンギスタ』（キング）にまとめられた。縁あってその彼女の写真約八百枚、紙資料約八〇点が日文研図書館に所蔵された。写真の中には彼女の夫君で歌手の内海一郎（「道頓堀行進曲」の創唱者）、デビュー当時の笠置シヅ子（三笠静子名義）やキング歌手丸山和歌子のサイン入りブロマイド、東宝スタジオ前でチョンマゲ姿の榎本健一（エノケン）を囲む記念写真、少女歌手ミミー宮島との記念写真、など芸能史上貴重なものが含まれている。一九三九年、日華事変二周年を記念して講談社が歌詞を募集し、彼女が千早淑子名義で録音に参加した「出征兵士を送る

歌」の発表会の様子も記録されている。「興亜大建設」と大きく垂れ幕のかかった舞台で、イブニングドレスのあでやかな姿で歌っているのはいつどこのことなのだろう。また軍人や要人と写った大陸慰問の写真や、アコーディオン奏者一人を脇に置いた野外の慰問演奏会の遠景もある。戦時期限定の芸能活動、芸能人の外地経験としての慰問に興味を持つ者にはまたとない刺激となる。

昭和初頭の関西の有力レーベル、ニットー、タイヘイ、クリスタルの舞台記録も数枚ある。なかでも目を惹くのは、トランペット、サックス、トロンボーン、ヴァイオリン、ベース、ドラムスを含む女性だけの一二名編成のジャズバンドで、今まで活字資料では見たことがない。同時代のアメリカで類似の女性スウィン

グ・バンドが人気を得ていたのを真似たのだろう。他にもマンドリン合奏にアコーディオンを加えた編成の女性バンドの伴奏で、松島らしき歌手が歌う写真もある。背景のペナントから察して、新宿にあった帝都ダンスホールのテイト・ミス・バンドらしい。彼女らの記録もいまだ見ていない。歌手は現場に応じた伴奏形態に即応する力を求められた。マンドリン連盟関連の雑誌には、各地のアマチュア合奏団（ほぼすべて男性のみ）しか記録されておらず、このような女性の、それも興行と結びついた楽団の存在には意表を突かれた。ダンサーの余技とも想像される。

戦前のダンスホールの写真は他にもだいぶある。たとえばメリー・クリスマスと英字で飾り文字のつけられたバンドスタンドで、ギター伴奏で男性五人が歌っている写真は、関西レーベルの垂れ幕があることから、同レーベル専属と考えられる（バンドマンの余興かもしれない）。レコード会社が積極的にダンスホールを利用していたことがわかる。この時期、ギター一本の伴奏の歌の録音はわずかしかないが、実演ではもっと普及していたとも想像される（非常な数の和洋流行歌ギター譜が出版されていた）。大太鼓や木魚、グロッケンシュピールが舞台に乗っているのもおやと思わせる。着物の踊り子数名が唐傘さしてダンスフロアで踊る写真もある。天井からは花の飾りつけがぶら下げられ、壁面には松島が所属したレーベルのアーティスト名入りの提灯が飾られている。戦前、ジャズ、タンゴの実演の場として最も重要だったダンスホールを、レコード会社は見逃すはずはなく、想像以上に深く関わっていたらしい。

写真もさることながら、チラシ、プログラムが貴重だ。たとえば今回初めて新宿の帝都舞踏場（一九三一年開場）の『ＴＥＩＴＯ』という一〇頁ほどの配布物を目にした。有力映画館が配っていた宣伝誌と似ている。松島の写真を表紙にした号（一九三五年二月）を開くと、彼女

をゲストとする唄と踊りのオトシダマ・ショオなるものが四日間開かれることがわかる。上の唐傘のショーはこうした特別企画のひとつなのだろう。別の号（一九三四年）では松島が浅草の魅力を語るエッセイの他、人気歌手天野喜久代と小林千代子、朝鮮出身の映画監督日夏英太郎（許泳（フュン））の文章、ダンサーの理想の男性像アンケート、近くの第一劇場の少女歌劇らしいグランドレヴューの広告、ダンスホール御用達の靴屋や洋装店の広告などが編集され、興味が尽きない。別のチラシによれば、帝都ホールには古賀政男と彼のテイチク・マンドリン・グループ（たぶん明治大学マンドリン・クラブの変名）が出演し、ディック・ミネ、楠木繁夫、チェリー宮野（二世歌手・ダンサー）、それに松島が登場するショーも催された。テイチク時代の古賀（一九三四～三八年）の先進性に、彼女はうまく波長が合った。調査が進めば、ムーラン・ルージュ劇場で知られる戦前新宿のモダン文化のなかで、このダンスホールを位置づけることができるだろう。

山陽から上京直後の松島は、コロムビア・レーベルの納涼大会（一九三二年、於日比谷新音楽堂）で天野喜久代、バートン・クレーン（米人ジャーナリストの歌手）、二村定一とエノケン、フランス渡りの巴里ムウラン・ルウジュ・フロリダ・バンド、柳家金語楼ら大物に混じって舞台に立っている。その前後には二村らと同レーベルの地方巡業にも加わり、美しい新人歌手としてしっかり売り出されていた。同レーベルの山田耕作に推薦されたという逸話が残っている。またスチルマン化粧品がスポンサーとなったショーでは淡谷のり子、牧野周一（漫談）、ジョージ堀（タップ）らと並んでいる（ウテナ化粧品のショーへの出演記録もある）。スチルマンの宣伝文句「さよならそばかす」と彼女のクローズアップが並んだチラシを見ると、そばかすさまさま、という邪心（？）が湧いてくる。レコード会社と企業のタイアップはこの時期

の芸能界の新しい側面で、もちろん現在につながる。

彼女は大学の音楽部とも関係が深く、六大学芸術祭で明治大学マンドリン・クラブと競演し、同クラブの九州公演につきあった。古賀つながりであろう。早稲田大学ハーモニカ・ソサイエティの定演（一九三六年）で、『蝶々夫人』から「ある晴れた日」と古賀作曲の「涙の春」を歌った記録もある（その練習風景と思しき写真もある）。そのメンバーにはギター、ハワイアン・ギター、ウクレレもいて、当時いうジャズに近いサウンドを作っていただろう。同じ会には松竹少女歌劇からのゲスト歌手もいて、純粋なハーモニカ同好会の枠を越えている。六大学はスポーツだけでなく、音楽方面でもプロにつながり羽振りを利かせた。

このように彼女にとってクラシックと歌謡曲が並ぶことに違和感はなかった。上の納涼大会の数ヵ月後、フランス留学より帰国したばかりの高木東六のピアノ・トリオとともに米子、倉吉を巡業した折、シューマン、シューベルト、山田耕作らの歌曲を歌っている。山口県の高等女学校を卒業し、広島の女学校で教鞭を執った後に上京し（その女学校の音楽会ではロッシーニと近衛秀麿を歌っている）、声楽のレッスンを受けた松島にとって、ピアノ伴奏の歌曲は馴染みのはずだが、録音は残していない。当時、音楽学校で専門教育を受けた後に和洋の大衆歌謡を歌う歌手として、レコード会社と契約する例は多かったが、これだけ舞台出演の資料を残し、曲目の幅を伝えてくれた歌手は他にいない。

松島コレクションはどのアイテムにもぞくぞくする。彼女についてばかりか、戦前興行界の知られてこなかった部分の貴重な証言に満ちている。あまりに断片的で、これだけから彼女の伝記を組み立てるのはむずかしいが、音楽生活の広がりを知ることは歴史的な豊かさにつながる。日文研は現在、大衆文化研究を中期プロジェクトに掲げている。広くはマンガ、アニメ、

ゲームなど「いまどき」クール物を視野に入れるが、歴史的な視野を広げようとしている点にセンターらしさがあるだろう。最近寄贈された浪曲のＳＰ盤約一万枚を使う共同研究班が二〇一六年度に立ち上がる。松島詩子コレクションは、それと隣接した流行歌研究にまたとない素材を提供してくれる。

（国際日本文化研究センター教授）

モンティ・ホール問題

森　洋久

一九六〇年代に始まったアメリカＮＢＣ、のちＡＢＣの人気番組「Let's Make a Deal」の話をしよう。この番組の特に人気のあるくだりは、一般からの出演者が、三つの扉の向こうに隠された景品を当てるコーナである。司会者モンティ・ホールの軽快なリードのもと、出演者が一つの扉を選ぶ。直後に、モンティ・ホールは素直にその扉を開けるわけではなく、出演者の選ばなかった二つの扉のうち一つを開けてみせる。そこにはハズレを意味するヤギがいる。モンティ・ホールは、「ほら、このとおり、この扉はハズレでした、さて、正解はあなたの選んだ扉か、あるいは、もう一つの扉ということですよ。ここで、扉を選び直しても構いません。これが最後のチャンスです。」という。さて、あなただったらどうしますか。

モンティ・ホールに与えられた最後のチャンスのとき、出演者は扉を選びなおしたほうが良いのか、それとも、自分の最初の選択を堅持したほうがいいのか、全米で論争になった時があった。ニュース雑誌 Parade に「Ask Marilyn」という、読者からの様々な疑問に答えるコラムがあり、ここの読者からの質問がはじまりであった。このコラムを主宰していたのは、マリリン・ボス・サヴァント（Marilyn vos Savant）という、もっとも高いＩＱをもつ人物としてギネスブックにも載ったほどの人物である。マリリンは、この質問に、一九九〇年九月九日版のコラムで「選びなおしたほうが良い」と、いともあっさり答えた。ところがその後、この解答に対する反対者があらわれはじめ、高名な数学者までも巻き込んだ大議論に発展してしまった。マリリンはその論争を著書「The Power of Logical Thinking」で回顧している。これが世に言う「モンティホール問題」である。

マリリンへの反論者の言い分はこうである。コーナが始まる前に景品は三つの扉のうちどれかの後ろにすでにセットされている。どの扉の後ろかは、ランダムに決められるので、どの扉もあたりの確率は⅓である。司会者が一つの扉を開けたところで、確率が変化するはずがない。挑戦者が、後で扉を選び変えたとしても当たる確率は⅓で、選び直す意味はないのだ。という。

わたしも周囲の面々にこの話を持ち出してみたが、「変えなければならない衝動に狩られるけれど、変える必要はない。」とか、「なんとなく変える方がよさげだが、その理由はよくわからない。」といった答えが返ってくる。

だが、マリリンへの反論が正しくないことはこんな風に考えて見るとわかるのではないか。司会者が何をしようとも、どの扉も確率は⅓で変化しないと仮定するならば、モンティホール

があける扉も御多分に洩れずである。つまり、⅓の確率でモンティホールは景品が入っている扉を開けてしまうことになる。そうとなれば、そこで直ちにゲームセットとなる。番組の三回に一回はこういう面白くない事態に陥るのである。

モンティ・ホールは最後のチャンスを促す時、景品のある扉を開けるはずがない。この問題には暗黙の前提があるのである。暗黙の前提がなにか、これをはっきりさせないと、このゲームの確率計算はできないはずなのであるが、マリリンへの反論は、この暗黙の前提を忘れてしまっていたためにおきた。ゲームのルールをつぎのように整理しよう。

(1) 三つの扉（A、B、C）から無作為に選ばれた一ヶ所に景品が入っている。他にはヤギがいる。
(2) 挑戦者は扉を一つえらぶ。
(3) モンティ・ホールは選ばれた扉以外の二つから扉を一つあける。
(4) モンティ・ホールの開ける扉は必ずヤギがいる。
(5) モンティ・ホールは挑戦者に扉を選び直して良いと、必ず言う。

(1)は、最初の段階では、挑戦者にとって、どの扉も景品の入っている確率は⅓であるということである。そして、(2)のプロセスで挑戦者は扉Aを選んだとしよう。このとき、もっとも直感的な説明はこうだ。

表1を見ていただきたい。表の左case 1.〜3.は、扉A、B、Cの向こう側に景品がある状態を示している。○のところに景品がある。それぞれのcaseのとき、モンティ・ホールがどの扉をどのくらいの確率で開けるかを示したのが、表の右側である。case 1.の場合は、等確

表１　モンティ・ホール

	確率	扉 A	扉 B	扉 C
case 1.	1/3	○	×	×
case 2.	1/3	×	○	×
case 3.	1/3	×	×	○

⇒

扉 A	扉 B	扉 C
○	1/2	1/2
×	○	1
×	1	○

率でB、Cのいずれかを開ける。case 2.,3. では、B、Cのいずれかのうち、明らかに、モンティ・ホールが開けなかった方に景品がある。

こう考えれば、Aを選んだ挑戦者が、Aを維持して、景品を当てるのは、case 1. のみなので、確率 ⅓ である。出演者が答えを変えて、景品を当てるのは、case 2.,3. の合計 ⅔ の確率ということになる。答えを変更した方が確率が上昇することがわかる。

ヤギの入った扉を開けるというモンティ・ホールの行為は、実は挑戦者に不完全ながら情報を与えているのである。そのことによって、挑戦者の確率が変動する。情報とは確率であるという所以である。

話は変わって、詐欺の話をしよう。最近よく「おれおれ詐欺」なる詐欺が流行っているそうであるが、伝統的な詐欺として未公開株を売りつける詐欺などもある。これから話をするのは後者の詐欺だ。いいカモとなるのは定年退職したばかりの夫婦といったところだろうか。あるいは、財産もそこそこ持っている、一人暮らしの老婦人だろうか。ある日、老婦人のところに、腕利きの相場師となのる人物から電話がかかってくる。相場師と名乗る男は、新しい株式予測の方法を開発したという。その方法によれば、株価の推移は百発百中だそうだ。

この新しい手法を元手とした新しいトレーディング会社を設立したので、ぜひ、我々に投資しないかという話である。

老婦人が躊躇していると、その男は、
「にわかに私たちを信じることはできませんね」と言う。「まずはお試しとして、我々の予測情報を提供しましょう。たとえば、○○銘柄は一週間後には値上がっているでしょう。」という。
一週間後、老婦人は新聞の株価欄を見てみると、確かに、○○銘柄は上昇している。間も無く、相場師の男が再び電話をかけてくる。
「どうですか、当たっていたでしょう。来週はと言いますと、こんどは、○○銘柄は下がるでしょう。」
一週間後、確かに下がっている。三度目の電話で男は、
「どうですか、当たっていたでしょう。来週はと言いますと、三度目の正直です、○○銘柄の値段は、今度は上昇します。」という。
もちろん、一週間後これが当たっているのである。最後の男の電話で、男を信じこみ、老婦人は契約を結んでしまったならば、大切な遺産を身ぐるみ持って行かれてしまっただろう。
ところで、この相場師は、気まぐれな株価をどのように当てたのだろうか。株価は上がるか下がるか、であるとするならば、三回の予測のパターンは合計八通りしかない。
一〇〇人ずつ8組の、合計八〇〇人のカモの集団を準備する。これらのカモに片っ端から電話をかける。もし、何回目かに予測が外れた集団は、もうその時点で捨てる。しかし、必ず一〇〇人は完全正解となる。老婦人はたまたまその正解集団の一人だったというわけだ。
我々が必然的結末として疑うべくもなく確信している現象は、俯瞰的な立場からみたらば、案外、気まぐれに起こっている多数の事象のある一つにすぎないのかもしれない。我々自身の

表２　二人へ貸した場合の返済額期待値

	返済額	確率	計算方法
二人ともに踏み倒される場合	0円	9%	((1−0.7)・(1−0.7))
どちらか一方に踏み倒される場合	100万円	42%	(2・0.7・(1−0.7))
どちらも返済する場合	200万円	49%	(0.7・0.7)

存在がたまたまその事象とセットでしか成り立ち得ないために、その事象を必然的と「勘違い」しているのかもしれない。

進化の帰結というものもそうであるし、文化や歴史も然り。ところが、物理学にもこの話を応用する人がいる。我々を取り巻く自然界の法則は、なぜそのようになっているのか。いや、様々な文化や歴史の国があるように、いろいろな異なる法則の宇宙が実はたくさんあるのだ、という。だが、我々の見る自然法則でない宇宙では、我々はこの形で生まれなかっただろう。この形で生まれなかったら、このように自然法則は認識できない。従って、自然法則はこのようになっている。

これを物理学の人間原理と呼ぶ。昔、子供の頃によく聞いた、「サギはなぜ片足で水辺に立っているの？」「その足も引き上げたら倒れちゃうからだよ。」という謎かけを思い出す。実際、人間原理は、自然法則について何も説明していない。

だが、細部を説明できなくても全体が成り立ってしまうことはよくある。先の詐欺の話も、老婦人は損するが、詐欺師は損しない。そして次に、信用のない人々に対してお金を貸しても、お金を回収した上で儲けることができるという話をしよう。

お金を貸し付けた場合、一〇年後に返済してくれる確率が70%という人を仮定しよう。同じ人が一〇人いれば一〇回に三回は貸し倒れるという意味であり、信頼度70%の人という言い方ができる。

さて、あなたは金持ちだったとする。この人に「一〇年後は二倍にして返してほしい」と言って、あなたは一〇〇万円を貸せるでしょうか。あなたは30％の確率で一〇〇万円を失ってしまうかもしれないと考えると、相当リスキーである。しかし、もし、同じ信頼度の人が二人いて、それぞれに五〇万円合計一〇〇万円貸すと想定した場合はどうだろう。

表2によれば、完全に損するのは一割に満たない。その一方でおおよそ貸したお金がそのまま戻ってくる。あわよくば49％の確率で（これもそんなに悪くない値だ。）儲かる。この数値を見てあなたも少し心が揺らぐのではないだろうか。一人より二人集めれば、その平均的な振る舞いの方によって、全体的な信頼度が上がり、91％の確率で一〇〇万円以上が戻ってくる。このとき「一〇〇万円以上」というものを91％信頼区間と言う。50％信頼区間といえば、

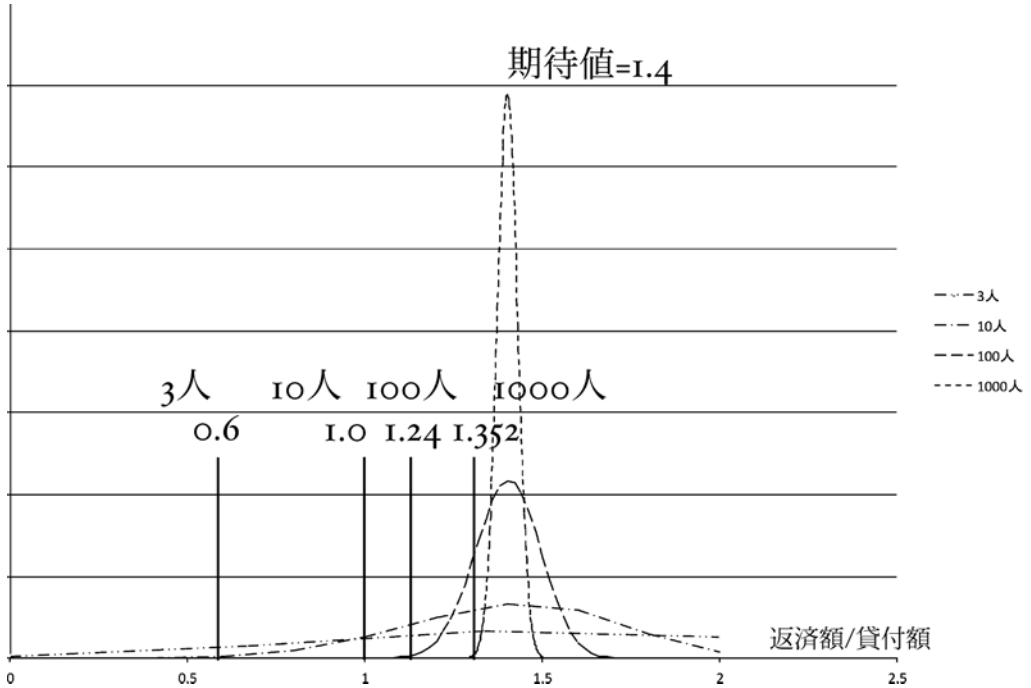

図１　対象人数と95％信頼区間

「二〇〇万円以上」ということになる。信頼区間は狭い方が良いが、確率を上げ、より確実にしようとすると信頼区間は広くなる。

もしあなたがかなりの慎重派で、95％の信頼性を確保しないと貸さないというならば、二人に貸すのでは人数が足りない。それならば、三人では、四人では…と人数を増やして行くと、どうなるだろうか。

図1は貸し付け対象人数を、三人、一〇人、一〇〇人、一〇〇〇人と増やして行ったときに、貸付額の何倍（横軸）がどれくらいの確率で返ってくるかをグラフにしたものである。このグラフにより、95％信頼区間を計算すると、三人のときは、〇・六倍以上返済され、一〇人のときは一倍以上、一〇〇人のときは、一・二四倍以上、一〇〇〇人のときは、一・三五二倍以上偏差されることとなる。グラフは人数が増えるにつれて、なだらかな形から急順に切り立った山型になっていく。原理的には、期待値の一・四倍に近づいていく。こうして見ると、一〇〇人、一〇〇〇人の債務者を集めれば、一人一人の信頼度とは無関係に、ほぼ確実に儲かることがわかる。

このように、平均という母集団全体の振る舞いは、母集団が大きくなればなるほど、個別の事象の振る舞いとの間の相関関係が希薄になっていく。たとえば、コインを投げて裏が出るか表がでるか回数を数えると、少ない回数ではどちらかに偏りがでる。しかし、コインの裏表の結果が完全にランダムである場合、回数を重ねれると、裏表の割合は半々に収束していく。このように、ランダムな試行の場合試行回数を重ねれば、ある平均的な割合に落ち着いていくという性質を大数の定理という。

この原理をみてわかることは、とにかくたくさんの債務者を集めて貸し付ければ、リスクを

負わず儲かるということだ。多く貸し付けるためにはお金がいるのだから、つまり金持ちはますます金持ちになる、ということである。

確率には二つの考え方がある。一つは、何回も試行を重ねた結果、得られた割合としての確率。頻度確率ともいう。大数の定理に従った貸付がそれである。あるいは、詐欺師の見ている俯瞰的な状況である。ロナルド・フィッシャー流の統計学はこの立場に立脚している。授業で習う確率や統計はこの手法が一般的だろう。しかし、頻度確率の恩恵に預かれるのは、詐欺師や大金持ちである。

モンティ・ホールの挑戦者には、過去の番組をくまなくチェックし、三枚の扉のどこに景品が入っていたかを調べ尽くし、頻度確率を求めるような奴もいたかもしれない。だが、金持ちでもなく、善良な市民であろうとする我々が、問題に遭遇する多くの場面では、情報と言えるものはモンティ・ホールの見せるヤギのようなものだ。

三枚の扉の向こうに景品がある確率は⅓、⅓、⅓である、というのは、不確実な状況に出会った我々の率直な気持ちの体現である。トーマス・ベイズが提唱した、もう一つの確率の考え方は、このような人のもつ感覚的な情報量を表したもので、不確実性確率という概念である。しかし彼の考案したベイズ推定という方法によれば、モンティ・ホールのヒントを逃さず、少ない試行でも回数を重ねるうちに頻度確率に近づいていく。二つの概念は矛盾するものではない。

現代は、情報とカネを集めたものが勝つという時代、扉の向こうに隠れたヤギのように、したたかに生きて行くすべはないものか。

（国際日本文化研究センター准教授）

私と日本演劇

李　応寿

還暦もすぎると、当然ながら、今まで生きてきた人生がこれから生きる人生より長かったことに気づく。それでか、昔から人々は、還暦を人生の大きな節目として認識し、この時点で改めて過去を振りかえり、新たに、未来を設計するようだ。いわば人生という山から下りる準備をするのである。

私も、その例外ではない。去年還暦を迎えたが、夏になって、理由もなく、白頭山（ペクトゥサン）に登りたくなった。それで、韓半島（朝鮮半島）の最高峰にある天池（チョンジ）に向かいながら、ゆっくりと、今までの人生を振りかえる機会を得た。そして、そこで思いついたのが「日本演劇」というキーワードである。

思えば、私と日本演劇とのつながりは、中学時代の映画好きに始まる。私は京畿道の清平（チョンピョン）という田舎に生まれたが、小地主の息子であったせいか、自分の好きなことはあくまでもやり通したがるやんちゃな性格を持っている。そして、その現われのひとつが映画であった。

映画好きになった具体的なきっかけは思い出せないが、中学のころ、年に何回も都心の大韓（テーハン）劇場や中央（チュンアン）劇場などの大型劇場に教師に引率され、今は名画劇場を飾る「ベン・ハー（Ben-Hur）」や「ドクトル・ジバゴ（Doctor Zhivago）」などを観た覚えがある。

それは、おもしろかった。特に、七〇ミリで大型スクリーンに繰り広げられる異国の風情

と、それに伴う世界のトップ・レベルの俳優たちの演技には目を奪われた。それで私は、今も、チャールトン・ヘストン（Charlton Heston）やオマー・シャリーフ（Omar Sharif）のファンである。

もちろん、好きな女優もいた。「ドクトル・ジバゴ」のラーラ（ジュリー・クリスティ扮）も魅力的であったが、高校に入り、思春期になってからは、カトリーヌ・ドヌーヴ（Catherine Deneuve）に魅せられ、『シェルブールの雨傘』や『別離』などを何回も観ている。

それに、毎月日本の映画雑誌の『スクリーン』を購入して隠れ読み、一〇年近く保管したこともある。しかし、それは大学の入試に響いた。私は一次入試では、ソウル大学の地理学科を志願していた。しかし、当時のソウル中・高等学校の出身は半分以上がソウル大学に合格したにもかかわらず、見事に落ちてしまった。

それで、ソウル大学にはない専攻ということで韓国外国語大学の日本語科に入学し、善きにしろ、悪しきにしろ、日本と縁を結ぶことになる。大学に入るや、私は、いち早く校内の演劇サークルに入った。それは、演劇が映画に似ている、いやむしろ「活きた映画」であると思ったからである。

そこには、今や韓国の国民俳優といわれる安聖基（アンソンギ）がいた。安聖基は、私の初舞台を演出した。一九七三年、つまり一年生の夏のことで、演目は、アントン・チェーホフ（Anton Chekhov　一八六〇～一九〇四）の『熊』である。学生売店の地下の仮設舞台であったが、男性主人公のグレゴリ・ステパノビチ・スミルノフ役を演じ終えた時は、実に、快感を覚えた。

それから、学年が上がるにつれ、スタッフ、企画、助演出、演出を担当するようになり、その都度満足感は増していったものの、逆に、専攻の日本語の勉強は疎かになっていった。あげ

くの果て、三年生になった時点では、いよいよ進退を決めなければならない状況に陥ってしまった。

そこで考えたのが、専攻と趣味の接木である。私は、日本語科に提案した。日本語の原語演劇をやろうじゃないかと。理由は簡単である。自分の日本語の能力を上達させたかったからである。そしてそれが、出演する学生たちの日本語能力をも向上させ、ひいては、韓国外国語大学の日本語科の団結にも役立つと思ったからである。

先生たちは、快く許可してくれた。作品は『白鳥』、演出は私である。しかし、いざ始めてみると、奈良時代を背景とする作品であるだけに、舞台装置はむろんのこと、衣装や扮装など、すべての分野で古代の雰囲気を出さなければならない。それに、演出家の語学力も足りない。

私は、途方に暮れていた。その時、指導を買って出たのが熊田和子先生である。先生は毎日のように稽古場を訪れ、髪の結い方から袖の長さまで細かくチェックをし、直してくれた。そのおかげか、男の主人公を演じた具廷鎬（クジョンホ）さんは、今や中央（チュンアン）大学の教授となり、日本の古典文学を教えている。

私も、たいへん勉強になった。当時は、今のように日本往来が自由な時代ではなく、日本語に接する機会が少なかった。したがって、日本語に自信を持っている人でも、清音と濁音の区別はもとより、長音の長さを間違う人が多かった。そのような雰囲気のなかで、いちいち矯正してもらう機会に恵まれたのである。

しかも、私は演出という重責を担っている。出演者はそれぞれ自分の科白を覚えれば済むのだが、演出家は、そうはいかない。出演者を指導しなければならない立場にもあるので、戯曲を丸ごと暗記しなければならない。先生のたび重なる指摘に加え、この丸暗記が非常に役に

立った。

基礎を固めてからは、自由自在に羽を伸ばした。繁華街の明洞（ミョンドン）に出て見知らぬ日本人に話をかけたり、日本人留学生の集いと聞けば駆けつけては、ビールをおごったりした。なかでも、同じ演劇部の在日韓国人留学生の李東石（イドンソク）さんとは、一年生の時からずいぶん親しく過ごした。

やがて私は、日本の文部省の国費留学生に選ばれた。そして、外大演劇部主催の手厚い送別会で、今は牧師になって鉄原（チョルウォン）で開拓教会を運営する金東旭（キンドンウク）会長から「韓国の土」入りの宝石箱を手渡され、それを胸に抱え、日本の地を踏んだ。一九八〇年の春のことである。

以後、私は、東京大学大学院人文科学研究科、後の総合文化研究科の比較文学比較文化専門課程で、帰国までの七年半のあいだ、研究生、修士課程を経て、博士課程を修了するのだが、そのたびに、いろんな人にお世話になった。まず、私を東京大学に導いてくれたのは、映画評論家の四方田犬彦さんである。

四方田さんとは、祥明（サンミョン）大学の日本語演劇の時に出会った。演目は、確か三島由紀夫の「近代能楽集」のなかの『綾の鼓』だったと思う。四方田さんが演出、私が演技指導を担当し、二ヶ月ばかり、共に稽古に励んだ。そしてその過程で、彼は映画、私は演劇ということもあり、意気投合した。

あの朴正熙（パクジョンヒ）大統領暗殺事件の直後のこと。慌しい社会雰囲気のなかで、私の留学先が決まらなくて困っていた時も、彼は、折りよく韓国を訪れていた小山弘志先生を紹介してくれた。その小山先生の推薦状で、私の東大行が決まったのである。運命は予期しないところから訪れるというが、再三、実感した。

東京大学に来てからは、小山先生の授業で能や狂言の中世古典劇に親しむかたわら、小宮

彰、大澤吉博、上垣戸憲一といういわば三羽烏の先輩に誘われ、三宅坂の国立劇場で『菅原伝授手習鑑』を観たこともある。古語のため、内容こそ追いつけなかったものの、華やかさ極まる歌舞伎の舞台が印象に残っている。

チューターの菅原克也さんにも、ずいぶんお世話になった。彼は、日常生活はもとより、数々の演劇情報を教えてくれた。彼の誘いで、新宿中央公園の仮設テントで劇団四季の『キャッツ』を観た時は、日本のテント劇のスケールの大きさや繊細な舞台装置、そして俳優の歌唱力に圧倒された。

また、演劇情報誌の『ぴあ』や『ロード・ショー』を頼りに、観劇に出かけたことも、多々ある。つかこうへいの『熱海殺人事件』は、紀伊国屋ホールで観た。それで渋谷の宮益坂にある彼の事務所を訪れた時、つかさんが、自分の本名は金峰雄（キンボンウン）、故郷は慶尚北道の清道（チョンド）であると語ってくれたことが、今も、記憶に新しい。

このように観劇にふけっている最中、月刊誌『韓国演劇』から、日本演劇の状況を海外演劇情報欄に連載するよう頼まれ、李青雨（イチョンウ）というペンネームで書いた。とはいっても、アングラ演劇の巨匠鈴木忠志さんが富山県の利賀村で劇団ＳＣＯＴを旗揚げした時は、「利賀」の読み方が判らず、苦労したこともある。

鈴木さんとの因縁は、帰国後も続く。それは、韓国の金義卿（キムウィキョン）、中国の徐暁鍾、日本の鈴木忠志の三人が「BeSeTo（北京・ソウル・東京）演劇祭」を立ち上げた一九九四年から、立案者の金義卿さんの勧めもあり、私も、韓国側の委員に加わったからである。

BeSeTo活動のなかで最も印象に残るのは、二〇〇〇年の『春香伝』の上演である。韓国の国立劇場の大劇場で、第一幕（愛）を中国の浙江省小百花越劇団が、第二幕（受難）を日本の

松竹歌舞伎座が、第三幕（再会）を韓国の国立唱劇団がそれぞれ演じたが、三国の古典劇の様式比較のできる、実りのある舞台であった。

それから、『BeSeTo演劇祭一〇年史』を編んだ時のことも記憶に残る。この本は、もともと三ヵ国語で出版する予定であったが、時間が延び、経済的な制約が重なるにつれ、関係者のエッセイだけを二ヵ国語にする線で世に問うた。しかし、休日を問わず、夜遅くまで作業しつづけた日々になつかしさを感じる。

その後、私は、韓日演劇交流協議会で活動するかたわら、『日本演劇史』を翻訳したり、書いたりもした。また、二〇〇三年には洪善英（ホンソンヨン）らと共に「日本演劇を観る会」を結成し、以来、毎月日本演劇を観ている。その記録が『日本演劇を観る会一〇年史』で、出版に際しては、南（ナム）声鎬（ソンホ）さんや黄石珠（ファンソクジュ）さんの助力に負うところが大きかった。

還暦という峠を越えながら、今までの人生を振りかえるという意味で、「日本演劇」をキーワードに、記憶に残ったものを思い出すままに書いてみた。書き終わってみると、それなりに演劇、なかでも日本と韓国の演劇交流という大きな山を、ひたすら登り続けてきたような気がする。

さて、これからは下山である。下山については、五木寛之がおもしろい説を披露している。彼は、下山にも「思想」が要ると前提したうえで、下る時が登る時より転びやすい。だから一度転んでも、再び頂上を目指すことなく、軟着陸を試みるべきだと主張する。流石だ。私も、これからは、彼の説に従うことにしよう。

二〇一五年の暮れに。

（世宗大学校韓日芸能研究所所長／国際日本文化研究センター外国人研究員）

センター通信

Japan Review 三〇号をむかえて（その一）

ジョン・ブリーン

日文研が刊行している学術雑誌*Japan Review*（以下、ＪＲ）は今年、三〇号を迎える。大きな節目である。三〇号は「日本型世俗」をテーマとした特集号で、秋に出るが、夏にはもちろん通常号も出すので今年は忙しい。私がＪＲの編者を引き受けてから七年が経つ。責任の重い、事件の多い、楽しい七年間であった。この場を借りてＪＲ編者の仕事とは何かを簡単に説明してみたいと思う。まず、ＪＲの宣伝をし、原稿を募集するのが仕事である。国内外の学会などに出かけていき、名刺代わりにＪＲ最新号を配り、原稿を積極的に募る。もちろん日文研内でも募集するが、外国人研究員や専任教員の投稿は少ない。ＪＲのInternational Advisory Board（世界各地で活躍中の日本研究者一五名からなる。以下、ＩＡＢ）のメンバーにも、年二回メールを出し、原稿募集を依頼する。インターネットでも原稿を募る。私はＪＲを日本人の優れた研究を紹介する場にもしたいと当初から考えていたので、日本語の論文も募集の対象としている。日本語のままで査読に回し、通れば英語に翻訳するという流れになっている。それでも原稿が足りない。編集長として、もっとがんばる必要がある。今年は、Association of Asian Studies（ＡＡＳ、シアトル、四月）、AAS in Asia（京都、六月）、Spanish Association for Japanese Studies（マドリード、九月）にでかけ、ＪＲの宣伝をし、いい原稿を探してくる。大多数の原稿はこ

うして直接募るものだが、時に出し抜けに送られてくるものもある。

入ってきた原稿はまず査読に回す。査読者の選定については、編者の専門分野でない限り、ＩＡＢに相談する。推薦された査読者にメールで依頼する。ＪＲは査読者に謝礼を払うためか、断られることは少ない。ただ、査読報告を書いてもらうのに大変時間がかかることもある。査読者は世界的エキスパートであり、審査においては絶対的な存在である。掲載していいと言われた原稿を必ず掲載する。ダメだと言われたら掲載しない。私は載せてもいいと考えていたものを載せないケースもあれば、その逆もある。原稿をめぐって査読者の意見が割れると、第三者の意見を伺う。

提出された査読報告はそのまま執筆者に送る。却下された原稿に関しては、理由を自分なりに（優しく）説明する。掲載が決まったものについては、「おめでとう」と伝えたうえ、査読報告に対する執筆者のレスポンスを待つ。編者としての本格的な仕事が始まるのはそれからである。

ちなみにＪＲでは、論文だけでなく書評欄も設けている。各号に、（書籍紹介ではない）書評を一〇点載せる。毎年出版社から送られてくる何十冊もの本を一覧にし、ＩＡＢのメンバーに送り、評者を推薦してもらう。最近ではメンバーが自身の指導する大学院生を評者に推薦することもある。歓迎すべきことである。ほかには、ＩＡＢのメンバーや他の研究者から、「この本が話題になっているから書評を載せたらどうか？」、あるいは「最近出たこの本をぜひレビューしたい」といった連絡をもらうこともある。そうした場合、編者が出版社に依頼し、本を直接、評者に送ってもらう。書評を掲載する書籍のテーマ、出版社などに偏りが出ないよう気を配る。ＪＲの書評は査読には回さないが、編者が原稿を注意深く読み、内容・構成・文体などについて評者にアドバイスをし、やりとりを重ねる。

さて、論文編集に話を戻そう。論文が査読を通ったからといって、そのまま掲載されることはまずない。最も明快で優れた論文でも、査読者は（建設的な）注文をつける。執筆者がその注文に応えているかどうかのチェックを編者は行う。そしてそれらの原稿を綿密周到に読んでいく。序説・結論の書き方、論文全体の構成、議論の展開、論旨の明快さ、文体、脚注のつけ方、参考文献の組み方などについて助言なりコメントなりをする。執筆者自身のため、読者のため、そしてＪＲのために、最善のものへと原稿を磨いていく過程である。

この過程には数ヶ月かかるのが普通だが、一度だけ、二年以上にわたって執筆者とメールのやり取りをしたことがある。執筆者は英語が母語でなく、また少々難しい理論を使っていたので、原稿の内容には不透明なところもあった。ただ、お互いにとって非常に有意義な、長いやり取りであった。手を組んで修正していったその原稿は素晴らしいものになった。これこそは編集作業の醍醐味だ。執筆者とのコミュニケーションがもっとも密接なのは初校が出るまでだが、再校でも執筆者が修正したい箇所があればなるべく受け入れる。編者も再校の段階になって新しい問題点に気づくこともある。三校は編者だけが見る。

最後に、一冊のＪＲが世に出るまでには、日文研内にある出版編集室の貢献は欠かせない。出版編集室のスタッフは縁の下の力持ちである。彼女らに、初校・再校・三校のゲラの作成、原稿全体のスタイル（文体）のチェック、印刷会社・デザイナーとの連絡などを担当してもらっている。この編集体制の継続は、ＪＲの将来にとって死活問題である。（次号では、編者が着任してから試みたＪＲの様々な改革について紹介する。）

（国際日本文化研究センター教授）

感謝をこめて

阪口望み

私の一日は、まず手帳を開くことから始まります。小松所長が就任された日から今日までずっと、この一日の始まりは変わりません。新年度ごとに買い換えた手帳は、すでに四冊目も終わろうとしています。

私の仕事はおもに所長の予定の管理、多方面からの依頼の調整が中心です。毎日の所長の予定はもちろんのこと、原稿や回答の締切日、よくやりとりをする方たちの連絡先など、必要なことはすべて手帳に書き込んでいますので、これほど私にとって大切なものはありません。そして今、どの手帳のどのページをめくっても、すぐにそのときの場面を思い浮かべることができます。それほど、所長秘書としての四年間は印象的な毎日でした。

小松所長にあてて日々、所外・所内含め多方面から講演や執筆の依頼、会議の日程調整などの連絡をいただきます。そういった依頼を受けたらまず所長のご意向を確認し、それから相手方との調整に入ります。その際私がもっとも気をつけ

ていることは、依頼をお引受けする場合でも、残念ながらお断りせざるを得ない場合でも、私の言動ひとつでその後の所長の印象をよくも悪くも変えてしまうということです。私はこの仕事をするうえでこのことをとても大切に思い、毎日忘れることなく心がけてきました。

秘書業務は総務業務の延長線上にある、と私は考えています。まずは所属する団体全体のことを理解し、広い視野をもったうえで、ある一人の方（職場によっては複数の方の場合もあるとは思いますが）のお仕事を支えること。総務業務をこなせなければ、秘書業務は務まりません。

実はこれまで、秘書業務単独で働いた経験はありませんでした。本業務をもちながら、その合間に秘書業務のようなこと、という程度でしか触れたことのない世界でしたので、最初は本当に手探りの毎日でした。しかし幸い、総務業務の経験は十分にありましたので、今までに得た知識や経験にさらに細かく枝葉をつけていく、という感覚で、ひとつひとつの業務に丁寧に取り組むよう努めました。

総務の仕事とは、まず、内部のすべての部署間はもちろんのこと、内部と外部との取り次ぎを円滑にすること。問い合わせを受けたとき、その人が何を欲しているのかをすぐに判断し、要望に的確に応えること。そのために、いつ誰からどんな要求がきても応えられるよう、手が空いていなくても、ふりをしてでも手は空けておかなければならないこと。その集団の顔であることをつねに意識しておくこと。これらは、初めて総務職に就いたときに先輩方から教えられたことです。

「総務」というと、誰でもこなせる業務、と思われる方もいらっしゃるかもしれません。実際、語学などの資格は、あれば便利、程度のもので必須ではありませんし、複雑な業務もありません。ですがなにかに特化する必要がないぶん、まわりで起きているどんなことにも敏感に目を向け、幅広い視点・知識をもちながら、総合的に迅速な判断を下すことが求められます。自分自身が業務を抱えこんでしまって自分のことに夢中になるあまり、まわりを見る余裕を失ってしまう。これでは業務が成り立たないのが総務です。

秘書職はそういった総務業務をふまえたうえで、仕事の範囲は限定的になりますが、特定の方と密に接することになるため、すべての業務をバランスよく保つことがより大切になってきます。所長をはじめ、各方面からの要望に最短の時間で応えるにはどういった手順が最適なのか、仕事を頼みや

すい雰囲気を作るには日々自身がどうあるべきなのか。この仕事以上に、自分を見直す機会を与えてくれた仕事はなかったかもしれません。おかげで今の自分に足りないもの、これからの自分に必要なものを見いだすことができ、今後の自分にとっての選択肢が増えたことは、とても大きな自信になりました。

もちろん、納得のいく仕事ができなかったこともたくさんあります。自分自身で出した答えに、未だに疑問が残っていることもあります。白黒つかない答えを出すことが苦手な私にとって、そうせざるを得ない場面に出くわしたときはとても苦痛でしたし、逆にそういった答えを与えられて憤りを覚えたこともありました。合理的ではない答えに涙を滲ませる同僚と、一緒に悔しさを共有したこともありました。しかしそんな経験も、今となっては私が新しい一歩を踏み出すための後押しをしてくれています。

所長秘書として四年という長い時間を乗り切ることができたのは、ほかならぬ小松所長のお人柄、その所長を囲むみなさん、そして頼もしい先輩方や同僚に恵まれ、たくさんの方々に助けられたからです。妖怪についても多少詳しくなることができ、毎日楽しく仕事をさせていただきました。

私はこの三月で日文研を去ります。所内、所外に関わらず、たくさんの方々と出会えたことに心から感謝しています。私と少しの間でも関わってくれたみなさん、ほんとうにほんとうにありがとうございました。

（国際日本文化研究センター総務課総務グループ
総務係パートタイム職員）

共同研究

（二〇一五年四月一日～九月三〇日）

戦後日本文化再考

（研究代表者　坪井秀人、幹事　磯前順一）

〔共同研究員名〕

浅野麗、石川巧、岩崎稔、大原祐治、岡田秀則、長志珠絵、辛島理人、狩俣真奈、川口隆行、菅野優香、北中淳子、北原恵、木村朗子、高榮蘭、紅野謙介、五味渕典嗣、斉藤綾子、佐藤泉、塩野加織、島村輝、沈熙燦、申知瑛、鈴木勝雄、張政傑、十重田裕一、鳥羽耕史、戸邉秀明、成田龍一、朴貞蘭、橋本あゆみ、福間良明、松原洋子、水川敬章、光石亜由美、美馬達哉、村上陽子、尹芷汐、李承俊、鷲谷花、渡邊英理、渡辺直紀、郭南燕、北浦寛之、石川肇、杉田智美、栄元、王莞晗、田村美由紀、増田斎

〔海外共同研究員名〕

五十嵐惠邦、キャロル・グラック、酒井直樹

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一五年四月一一日

狩俣真奈「読書会　西川長夫、大野光明、番匠健一編『戦後史再考』（平凡社、二〇一四）第一章『戦後史再考』（西川長夫）」

石川　肇「読書会　西川長夫、大野光明、番匠健一編『戦後史再考』（平凡社、二〇一四）第三章『引揚者たちのわりきれない歴史―植民地主義の複雑さに向き合う』（杉浦清文）」

橋本あゆみ「読書会　西川長夫、大野光明、番匠健一編『戦後史再考』（平凡社、二〇一四）第四章『「占領」

とは何か』（西川祐子）」

二〇一五年四月一二日

栄　元「読書会　西川長夫、大野光明、番匠健一編『戦後史再考』（平凡社、二〇一四）第五章『占領と民主主義―民主主義の矛盾と「私論」の可能性』（沈熙燦）」

張　政傑「読書会　西川長夫、大野光明、番匠健一編『戦後史再考』（平凡社、二〇一四）第八章『ベトナム戦争体験とは何であったか―「対岸の火事」から見る日本』（岩間優希）」

尹　芷汐「読書会　西川長夫、大野光明、番匠健一編『戦後史再考』（平凡社、二〇一四）第九章『映画「家族」から見た高度経済成長』（番匠健一）」

李　承俊「読書会　西川長夫、大野光明、番匠健一編『戦後史再考』（平凡社、二〇一四）第九章『戦後史の外縁―誰が次の時代をつくるのか？』（崔博憲）」

〈第二回研究会〉

二〇一五年六月一三日

【一九五〇年代の『記録』と運動―幻灯、紙芝居、絵画と文学】

幻灯上映『松川事件　一九五一』（一九五一年）製作：人民幻灯協会（日本労農救援会）

鷲谷　花「《事件》を物語る幻灯―『松川事件　一九五一』と社会運動への幻灯の参入」

鈴木勝雄「現実批判としての絵画―形式の変革という観点から」

鳥羽耕史「下丸子からルポルタージュ叢書へ―〈現在の会〉がつないだもの」

二〇一五年六月一四日

美馬達哉「戦争の思考　フーコー　一九七六年を読む」

【占領期の京都とメディア】

石川　巧「幻の雑誌『国際女性』とその周辺」

西川祐子「織田作之助『それでも私は行く』」

コメント　北原　恵

石川　肇「井伊直弼とマッカーサー―舟橋聖一『花の生涯』前夜―」

辛島理人「戦後日本文化とアメリカの知日派」

討論者　申　知瑛

大原祐治「占領期におけるローカル・メディアのかたち―雑誌『月刊にひがた』の場合」

討論者　狩俣真奈

紅野謙介「『大菩薩峠』の戦後――京大人文研と受容の軌跡」

人文諸学の科学史的研究

（研究代表者　井上章一、幹事　瀧井一博）

〔共同研究員名〕

今谷明、上島享、上村敏文、鵜飼正樹、内田忠賢、長田俊樹、小澤実、小路田泰直、斎藤成也、佐藤雄基、関幸彦、高木博志、高谷知佳、竹村民郎、玉木俊明、鶴見太郎、永岡崇、林淳、シルヴィオ・ヴィータ、藤原貞朗、安田敏朗、若井敏明、荒木浩、伊東貴之、大塚英志、倉本一宏

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一五年七月三一日

井上章一「南北朝内乱前後の日本史に関するひとつの展望」

佐藤雄基「朝河貫一と欧米の歴史家たち」

討議「成果出版へむけて」

戦争と鎮魂

（研究代表者　牛村　圭、幹事　ジョン・ブリーン）

〔共同研究員名〕

岩崎徹、大東和重、加藤めぐみ、川村覚文、川本玲子、金志映、栗原俊雄、古田島洋介、小堀馨子、佐伯順子、末木文美士、谷口幸代、竹村民郎、等松春夫、永井久美子、西原大輔、眞嶋亜有、吉井文美、吉田（古川）優貴、今泉宜子、磯前順一、稲賀繁美、倉本一宏、松田利彦、劉建輝、郭南燕、朴美貞、西田彰一、エヤル・ベンアリ

〔海外共同研究員名〕

徐載坤、平松隆円、堀まどか

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一五年八月八日

一年目を振り返って（既発表者による報告等を中心に）

永井久美子「夫の菩提を弔うということ――『平家物語』小宰相を中心に」

画像資料（絵葉書・地図・旅行案内・写真等）による帝国域内文化の再検討

（研究代表者　劉　建輝、幹事　北浦寛之）

〔共同研究員名〕

安藤潤一郎、井村哲郎、上垣外憲一、岸陽子、呉孟晋、小

林茂、小林善帆、姜克実、白幡洋三郎、鈴木貞美、戦暁梅、単援朝、塚瀬進、鳥谷まゆみ、根川幸男、松宮貴之、森田憲司、李相哲、劉岸偉、仲万美子、伊東貴之、稲賀繁美、井上章一、松田利彦、森洋久、石川肇、陳其松、韓錫政

〔海外共同研究員名〕

王中忱、徐興慶、孫江

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一五年五月八日

姜　克実「日中戦争における日本軍の軍用地図について――山東省を例にして」

上垣外憲一「勝海舟について」

二〇一五年五月九日

井上章一「都市景観に見る日本の近代」

鄭　在貞「地図と写真で見る漢陽都城」

説話文学と歴史史料の間に

（研究代表者　倉本一宏、幹事　榎本　渉）

〔共同研究員名〕

上野勝之、内田澪子、追塩千尋、大橋直義、尾崎勇、加藤友康、川上知里、木下華子、小峯和明、佐藤信、佐野愛子、関幸彦、五月女肇志、曽根正人、多田伊織、蔦尾和宏、中村康夫、野上潤一、野本東生、樋口大祐、藤本孝一、古橋信孝、保立道久、前田雅之、松薗斉、三舟隆之、山下克明、横田隆志、呉座勇一、荒木浩、井上章一、中町美香子、谷口雄太、グエン・ニュー・ヴー・クイン

〔海外共同研究員名〕

グエン・ティ・オワイン、宋浣範、魯成煥、劉暁峰

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一五年五月一六日

研究会の成果等についての打ち合わせ

二〇一五年五月一七日

倉本一宏「説話文学と歴史史料の間に――花山院説話をめぐって」

荒木　浩「物語・談・著聞集の語りと史料性」

〈第二回研究会〉

二〇一五年七月四日

古橋信孝「新しい世界への関心」

保立道久「倭国神話とタカミムスヒ――火山と雷電の神」

三舟隆之「日本霊異記の史料性と関連史料―史料性の方法論」
尾崎　勇「『治承物語』の今様をうたう徳大寺実定の意味」

二〇一五年七月五日
大橋直義「史書・伝記・縁起―『扶桑略記』の多様な側面」
横田隆志「通天の帯の献上説話―『今昔物語集』巻二十六第一二話をめぐって―」
上野勝之「仏教説話とその素材」
井上章一「聖徳太子とネストリアン」

〈第三回研究会〉
二〇一五年八月二九日
小峯和明「東アジアの説話世界―第三極の説話・話芸論へ」
伊東玉美「日記と説話文学―『台記』の場合」
錦　仁「和歌の名所（歌枕）という説話」
マヤ・ケリヤン「History of Post-World War II Consumption: Japan and Bulgaria」

二〇一五年八月三〇日
谷口雄太「中世における吉良氏と高氏―室町期南九州史料にみる伝承と史実―」
加藤謙吉「山背秦氏の祖先伝承―秦公酒と秦大津父―」
渡辺精一「『夷堅志』が示唆するもの―『古今著聞集』、『徒然草』、花咲かじいさん」

おたく文化と戦時下・戦後

〈研究代表者　大塚英志、幹事　北浦寛之〉
〔共同研究員名〕
浅野龍哉、板倉史明、内田力、香川雅信、菊地暁、キム・ジュニアン、木村智哉、近藤和都、嵯峨景子、佐野明子、鈴木麻記、須藤遙子、滝浪佑紀、谷口恵太、鶴見太郎、冨田美香、中川譲、藤岡洋、細馬宏通、牧野守、室井康成、山路亮輔、山本忠宏
〔海外共同研究員名〕
キム・キュヒョン、秦剛、マーク・スタインバーグ、堀ひかり
〔研究発表〕
〈第一回研究会〉
二〇一五年四月二四日
浅野龍哉「『映画式まんが家入門』制作報告1」
斉　梦菲「中国少女まんがの方法」
山路亮輔「3Dモデリングまんがの方法」

討議「『翼賛家大和一家』をめぐって」

〈第二回研究会〉

二〇一五年五月二二日

山路亮輔「WEBコミックの文法変化についての研究・経過報告　3Dモデリングによる2Dキャラクターの設計」

谷口恵太「WEBコミックの文法変化についての研究・経過報告　WEB表現における色彩文法の検討」

浅野龍哉「海外向けまんが入門書制作の経過報告」

近藤和都「映画と印刷メディアの相関史―初期映画から角川映画まで」

斉　梦菲「戦前戦後まんが入門書資料報告」

アルバロ・エルナンデス「メキシコのまんがアニメ研究の現状」

〈第三回研究会〉

二〇一五年六月一三日

近藤和都「宣伝技法としての『館人格』一九二〇年代日本における映画館の興行モード」

パトリック・W・ガルブレイス「北米のオタク、ファン研究をめぐって」

大塚英志「〈おたく〉の発生　見えない文化大革命という問題」

コメント　蒋　蔵

〈第四回研究会〉

二〇一五年七月一七日

山路亮輔「リミッテドアニメにおける残像の問題」

谷口恵太「WEB表現における色彩文法の検討」

浅野龍哉「海外向けまんが入門書制作の経過報告②」

大塚英志「リミッテドアニメと第三のモンタージュ問題」

二〇一五年七月一八日

松井広志「戦時下における少年文化の形成―模型航空教育と兵器模型」

鈴木麻記「漫画を『描く読者』の成立―漫画家集団による『合作』を事例として」

斉　梦菲「中国における映画的手法の受容をめぐって」

〈第五回研究会〉

二〇一五年九月一九日

板倉史明「戦時下におけるアマチュア映画文化」

鶴見太郎「一九三〇年代の『アトリエ』運動」

日本の舞台芸術における身体―死と生、人形と人工体

（研究代表者　ボナヴェントゥーラ・ルペルティ、幹事　細川周平）

〔共同研究員名〕

赤間亮、板谷徹、井上理恵、岩井眞實、梅山いつき、菊地浩平、桜井圭介、佐藤恵里、滝澤修身、武井協三、竹本幹夫、カティア・チェントンツェ、土田牧子、中嶋謙昌、深澤昌夫、藤井慎太郎、森下隆、山田和人、李応寿

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一五年九月一二日

研究計画の概要、目的等について討論

佐藤恵理「俄の身体―『一夜漬け』の表現―」

日本の軍事戦略と東アジア社会―日中戦争期を中心として―

（研究代表者　黄　自進、幹事　劉　建輝）

〔共同研究員名〕

相澤淳、浅野豊美、家近亮子、井上寿一、王柯、加藤聖文、黒沢文貴、小菅信子、佐藤卓己、澁谷由里、姜克実、鈴木多聞、田嶋信雄、段瑞聡、戸部良一、波多野澄雄、服部龍二、馬暁華、松浦正孝、松重充浩、劉傑、鹿錫俊

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一五年四月二五日

王　柯「『中華』の思想から『中華思想』へ―日本における『中華思想』という言説の誕生」

小菅信子「中国における日本軍お英国人抑留者処遇問題について―対中戦争期から対英戦争期を中心に―」

二〇一五年四月二六日

黄　自進「日中戦争前夜における蔣介石の対日外交：反共連携論を中心に」

松浦正孝「財界人達の戦前・戦争・戦後―藤山愛一郎・村田省蔵・水野成夫とアジア主義」

戸部良一「日本人は『支那事変』をどう見たのか　一九三七～四五」

二一世紀一〇年代日本文化の軌道修正：過去の検証と将来への提言

（研究代表者　稲賀繁美、幹事　牛村　圭）

〔共同研究員名〕

鵜戸聡、大西宏志、岡本光博、小川さやか、小倉紀蔵、加治屋健司、鞍田崇、呉孟晋、小崎哲哉、菰田真介、近藤高弘、澤田敬司、白石嘉治、戦暁梅、全美星、滝澤修身、多田伊織、千葉慶、張競、テレングト・アイトル、長門洋平、中村和恵、西田雅嗣、西原大輔、二村淳子、波嵯栄ジェニファしょう子、橋本順光、範麗雅、平松秀樹、平芳幸浩、藤原貞朗、シルヴィー・ブロッソー、松原知生、クリストフ・マルケ、三原芳秋、本浜秀彦、山中由里子、山本麻友美、與那覇潤、マシュー・ラーキング、李建志、今泉宜子、林洋子、磯前順一、山田奨治、劉建輝、榎本渉、フレデリック・クレインス、森洋久、朴美貞

〔海外共同研究員名〕

大橋良介、デンニッツァ・ガブラコヴァ、王成

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一五年四月一七日

朴　美貞「李仲燮とディアスポラ―〈ニセ〉訴訟の真偽」

稲賀繁美「ヒロシマからフクシマへ：二〇世紀の文化遺産とは何だったのか？」

二〇一五年四月一八日

江口久美「パリの歴史的建造物保全―都市を見るまなざしの誕生（発表者著書『パリの歴史的建造物保全』中央公論美術出版、二〇一五年一月）」

〈第二回研究会〉

二〇一五年六月二〇日

稲賀繁美「ヒロシマからフクシマへ：二〇世紀の文化遺産とは何だったのか？」

鞍田　崇「民藝のインティマシー―『いとおしさ』をデザインする」

研究会の今後等について打ち合わせ

二〇一五年六月二一日

討論「海賊行為研究について」

〈第三回研究会〉

二〇一五年七月三〇日

アンドリュー・ガーストル「春画における男色の描写」

リカル・ブル・トゥルイ「春画の蛸とジャポニスム」

橋本順光「蛸をめぐる図像の越境と海賊行為―『山海名産図会』から『喜能会之故真通』を中心に」

コメント　石上阿希、矢野明子

二〇一五年七月三一日

野呂田純一「極東アジアにおける美術行政の〈土着化〉」
稲賀繁美「美術交流の翻訳学にむけて」
〈第四回研究会〉
二〇一五年八月二八日
「成果論文集の編集にむけて」
集中討議「海賊史観からみた世界史構想の刷新にむけて」
「海賊史観からみた二一世紀一〇年代日本の軌道修正」
申　昌浩「舞台（公演）芸術のための伝統邦楽器の改良――宮城道雄とその周辺の挑戦」

万国博覧会と人間の歴史――アジアを中心に

（研究代表者　佐野真由子、幹事　井上章一）
〔共同研究員名〕
石川敦子、市川文彦、伊藤奈保子、鵜飼敦子、江原規由、川口幸也、神田孝治、澤田裕二、寺本敬子、中牧弘允、芳賀徹、増山一成、武藤秀太郎、武藤夕佳里、橋爪紳也、林洋子、稲賀繁美、瀧井一博、ジョン・ブリーン、劉建輝、朴美貞
〔海外共同研究員名〕
青木信夫、岩田泰、ウィーベ・カウテルト、シビル・ギルモンド、徐蘇斌
〔研究発表〕
〈第一回研究会〉
二〇一五年五月一六日
「論集原稿についての報告」
森　隆一「博覧会作業の裏話」
二〇一五年五月一七日
暮沢剛巳・江藤光紀・鯖江秀樹「『万博に見る芸術の政治性――紀元二六〇〇年博の考察と国際比較を中心に』研究会からの問題提起」
討論「これからの万博研究」
今年度の活動についての打ち合わせ
〈第二回研究会〉
二〇一五年八月二七日
懇談「高良倉吉氏（琉球大学名誉教授、元沖縄県副知事）と沖縄国際海洋博覧会・沖縄館、海洋文化館リニューアル等について」
二〇一五年八月二八日
一般財団法人沖縄美ら島財団にて、現在の公園管理・運営の実際や、沖縄海洋博からの理念継承をめぐる現場の

考えなどについての意見交換
沖縄海洋博の理念や諸要素の継承・活用という観点から、海洋文化館、おきなわ郷土村、水族館を中心に視察
二〇一五年八月二九日
沖縄県立博物館・美術館（那覇市）見学

植民地帝国日本における知と権力

（研究代表者　松田利彦、幹事　瀧井一博）
〔共同研究員名〕
飯島渉、岡崎まゆみ、小野容照、加藤聖文、加藤道也、川瀬貴也、河原林直人、栗原純、洪宗郁、愼蒼健、通堂あゆみ、長沢一恵、アルノ・ナンタ、春山明哲、松田吉郎、宮崎聖子、やまだあつし、李昇燁、中生勝美、稲賀繁美、劉建輝、歐素瑛
〔海外共同研究員名〕
陳姃湲、山本浄邦、李炯植
〔研究発表〕
〈第一回研究会〉
二〇一五年五月二四日
岡崎まゆみ「植民地期朝鮮における『民事法』の形成―『専門家集団による「知」』の観点から」
松田利彦「東亜聯盟運動と朝鮮人―敗戦後日本における行跡を中心に」
河原林直人「台北帝国大学と台湾総督府の距離感：楠井隆三に着目して」
通堂あゆみ「学位授与から見る帝国の大学と植民地」
台湾でのワークショップ計画についての打ち合わせ
〈第二回研究会〉
二〇一五年七月一八日
李　昇燁「植民地統治と在野の知（二）：細井肇の朝鮮問題講演（一九二三～一九二四年）」
中生勝美「アメリカの日本研究：対敵戦略調査から学術研究への変貌」
歐　素瑛「台北帝国大学と熱帯気象学の展開―白鳥勝義を中心に」
二〇一五年七月一九日
西田彰一「植民地における筧克彦の活動について」
加藤道也「植民地官僚の統治認識―大内丑之助を手掛かりに―」

明治日本の比較文明史的考察―その遺産の再考―

（研究代表者　瀧井一博、幹事　牛村　圭）

〔共同研究員名〕

浅見雅男、五百旗頭薫、岩谷十郎、植村和秀、大川真、岡本貴久子、小川原正道、勝部眞人、加藤雄三、國分典子、塩出浩之、島田幸典、清水唯一朗、谷川穣、永井史男、長尾龍一、中村尚史、福岡万里子、前田勉、松田宏一郎、山田央子、奈良岡聰智、大久保健晴、林洋子、ジョン・ブリーン、佐野真由子

〔海外共同研究員名〕

アリステア・スウェール、ハラルド・フース

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一五年四月二五日

研究会の進め方、ガイダンス、趣旨説明、自己紹介

〈第二回研究会〉

二〇一五年六月五日

大久保健晴「近代日本の政治構想とオランダ―ヨーロッパ国際法との出会いを中心に―」

松田宏一郎「革命政権と『條理』・『慣習』（それから『情理』？）―政治的正当性と法源の論理」

二〇一五年六月六日

奈良岡聰智「対華二十一ヵ条要求とは何だったのか―一次世界大戦と日中対立の原点」

岩谷十郎「明治太政官期と法創造―拙著『明治日本の法解釈と法律家』・その後―」

〈第三回研究会〉

二〇一五年七月二四日

前田　勉「江戸の読書会と明治」

清水唯一朗「制度の政治史―統治をめぐる四つの枠組」

二〇一五年七月二五日

小川原正道「戦争と宗教―近代日本における相互関係」

植村和秀「昭和維新運動における『明治維新』イメージ」

〈第四回研究会〉

二〇一五年九月二六日

山田央子「栗谷李珥の朋党論―東アジアにおける『政党』論比較への一考察」

國分典子「韓国における近代国家観の形成」

二〇一五年九月二七日

塩出浩之「越境する移民たちの近代日本：アジア太平洋地

域における日本人の移民と植民」
岡本貴久子「『記念植樹』と日本近代―明治～大正～昭和の系譜―」

マンガ・アニメで日本研究

〔研究代表者　山田奨治、幹事　荒木　浩〕
〔共同研究員名〕
飯倉義之、石田佐恵子、伊藤遊、岩井茂樹、岡本健、高馬京子、金水敏、白石さや、西村大志、山中千恵、山本冴里、油井清光、横濱雄二、吉村和真、谷川建司、安井眞奈美、北浦寛之、宮崎康子、小泉友則
〔研究発表〕
〈第一回研究会〉
二〇一五年六月六日
作品検討　押見修造『惡の華』（二〇〇九～二〇一四）
紹介者　小泉友則
成果出版等について打ち合わせ
〈第二回研究会〉
二〇一五年六月二七日
日本マンガ学会第一五回大会参加
ラウンドテーブル「マンガ・アニメと〈戦い〉―社会・文化とのインターフェースを考える」
発表者　山田奨治、谷川健司、高馬京子、伊藤　遊、白石さや
二〇一五年六月二八日
日本マンガ学会第一五回大会参加
〈第三回研究会〉
二〇一五年九月二六日
作品検討『助産院へおいでよ』
紹介者　安井眞奈美
作品検討『るろうに剣心』
紹介者　北浦寛之
二〇一五年九月二七日
成果出版についての議論

新大陸の日系移民の歴史と文化

〔研究代表者　細川周平、幹事　瀧井一博〕
〔共同研究員名〕
赤木妙子、アンジェロ・イシ、粂井輝子、小嶋茂、佐々木剛二、スエヨシ・アナ、フェリッペ・アウグスト・ソアレ

ス・モッタ、高木（北山）眞理子、高橋勝幸、滝田祥子、根川幸男、日比嘉高、、松岡秀明、水野真理子、物部ひろみ、森本豊富、守屋貴嗣、守屋友江、柳田利夫、吉田裕美、早稲田みな子、栗山新也

〔海外共同研究員名〕

エドワード・マック、森幸一

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一五年六月一三日

エドワード・マック「ブラジルと新聞小説」

報告書出版に向けての打ち合わせ

二〇一五年六月一四日

工藤眞由美「南米・日系移民社会における言語接触のダイナミズム」

（文責：研究協力課）

基礎領域研究

フランス語運用の基礎／応用（継続）

代表者　稲賀繁美

概　要　フランス語の運用の基礎を実践的に訓練し、あわせて必要に応じて論文講読、仏文論文作成の手ほどきをする。

韓国語運用の基礎／応用（継続）

代表者　松田利彦

概　要　研究その他の業務で韓国語を必要とするものに対し、会話、読解、聴解の習得を目指した授業を行う。

中世文学講読（継続）

代表者　荒木　浩

概　要　『方丈記』や『徒然草』など、日本中世文学の文献を、影印を参照し、英訳などとも対比しながら精読する。

日本近代まんが史概論（新規）

代表者　大塚英志

概　要　サブカルチャー領域の研究を希望するこの分野の初心者に近代まんが史の初歩的な常識を概説する。

古記録学基礎研究（新規）

代表者　倉本一宏

概　要　日本前近代の根幹的史料である古記録の解読を、原本や写本の見方・扱い方も含めて考えていく。

文学・文化史理論入門（新規）

代表者　坪井秀人

概　要　文学および文化史に関する基礎的な理論を学びながらテクストの読解・分析の実践的方法を取得する。

彙報

（平成二七年四月一日～九月三〇日）

人事異動

◉平成二七年四月一日　称号授与
名誉教授　笠谷和比古
名誉教授　末木文美士
名誉教授　早川聞多

◉平成二七年四月一日　採用
准教授　楠　綾子

◉平成二七年四月一日　昇任
教授　磯前順一

◉平成二七年四月一日　契約更新
（特任研究員）
特任助教　宮崎康子

◉平成二七年四月一日　契約
（特任研究員）
特任助教　石上阿希
（客員）
外国人研究員　マヤ・ケリアン（ブルガリア科学アカデミー教授）
外国人研究員　モニル・ホサイン・モニ（アジア太平洋世界研究所グローバル日本研究プログラム研究教授）
外国人研究員　韓　錫政（東亜大学校教授）

◉平成二七年四月一日　委嘱
（客員）
教授　真鍋昌賢（北九州市立大学文学部教授）
教授　安井眞奈美（天理大学文学部教授）
准教授　今泉宜子（明治神宮国際神道文化研究所主任研究員）
准教授　大久保健晴（慶應義塾大学法学部准教授）
准教授　小川順子（中部大学人文学部准教授）
准教授　呉座勇一（東京大学大学院総合文化研究科学術研究員）
准教授　林　洋子（文化庁芸術文化調査官）

◉平成二七年五月三一日　契約期間満了
（客員）
外国人研究員　黄　自進（中央研究院近代史研究所研究員）
外国人研究員　ランジャナ・ムコパディヤーヤ（デリー大学准教授）

◉平成二七年六月一日　契約
（客員）
外国人研究員　李　愛淑（国立韓国放送大学教授）

◉平成二七年六月一五日　契約
（客員）
外国人研究員　歐　素瑛（国史館纂修）

◉平成二七年七月一日　契約
（客員）
外国人研究員　張　寅性（ソウル大学校教授）

◉平成二七年七月三一日　契約期間満了
（客員）
外国人研究員　ミシェル・モール（ハワイ大学マノア校准教授）

◉平成二七年八月一日　契約
（客員）

外国人研究員　イーゴリ・ボトーエフ（ブリヤート国立大学准教授）

◉平成二七年八月三一日　契約期間満了

（客員）

外国人研究員　アンドリュー・ガーストル（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院教授）

外国人研究員　梁　嶸（北京中医薬大学教授）

外国人研究員　朴　正一（釜山外国語大学校教授）

◉平成二七年九月一日　契約

（客員）

外国人研究員　グエン・ヴー・クイン・ニュー（在ホーチミン日本国総領事館広報文化班アシスタント）

外国人研究員　李　応寿（世宗大学校韓日芸能研究所所長）

外国人研究員　龔　顥（中国社会科学院哲学研究所研究員）

外国人研究員　ボナヴェントゥーラ・ルペルティ（ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学教授）

◉平成二七年九月一六日　契約

（客員）

外国人研究員　エヤル・ベンアリ（キネレット大学社会安全保障センター所長）

日文研フォーラム

第二八八回［平成二七年四月一四日（火）］

発表者　アンドルー・ゴードン（ハーバード大学教授／日文研外来研究員）

テーマ　日本をめぐる認識変容――高度成長期から「失われた二〇年」を通じて

コメンテーター　瀧井一博教授

第二八九回［平成二七年五月一二日（火）］

発表者　黄　自進（中央研究院近代史研究所研究員／日文研外国人研究員）

テーマ　蔣介石の日本像

コメンテーター　劉　建輝教授

第二九〇回［平成二七年六月一一日（木）］

発表者　朴　正一（釜山外国語大学校教授／日文研外国人研究員）

テーマ　火の女神と神になった男――一六世紀の井戸茶碗を中心に――

コメンテーター　谷　晃（野村美術館館長）、森　洋久准教授

第二九一回［平成二七年七月七日（火）］

発表者　ガリア・トドロヴァ・ペトコヴァ・ガブロフスカ（ブルガリア国立演劇映画芸術アカデミー客員講師／日文研外来研究員）

テーマ　おんなもの――日本の伝統芸能における「女性」の登場とその表象をめぐって

コメンテーター　佐伯順子（同志社大学教授）、森山直人（京都造形芸術大学教授）

第二九二回［平成二七年九月一五日（火）］

発表者　リチャード・トランス（オハイオ州立大学教授／日文研外国人研究員）

テーマ　何でそんなに愛され、そんなに憎まれるのか――文学キャラクターとしてのスサノオノミコト

コメンテーター　ジョン・ブリーン教授

木曜セミナー

第二一六回［平成二七年四月一六日（木）］
話　者　井上章一副所長
テーマ　現代建築を考える―合評　井上章一『現代の建築家』（ＡＤエディタトーキョー、二〇一四年）
書評者　稲賀繁美教授、佐野真由子准教授

第二一七回［平成二七年五月二一日（木）］
話　者　郭　南燕准教授
テーマ　雑誌『世界の日本研究』の回顧と展望
討論者　瀧井一博教授、松田利彦教授、山田奨治教授、劉　建輝教授

第二一八回［平成二七年六月一八日（木）］
話　者　楠　綾子准教授
テーマ　日米同盟研究――歴史と理論

第二一九回［平成二七年七月一六日（木）］
話　者　石上阿希特任助教
テーマ　日本古典籍の図像／図版データベース構築にむけて

第二二〇回［平成二七年九月一七日（木）］
話　者　倉本一宏教授
テーマ　倉本一宏著『平安朝　皇位継承の闇（「狂気の天皇」）』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ、二〇一四年）と『「旅」の誕生（東海道の「旅」）』（河出書房新社、二〇一五年）を斬る！
書評者　牛村　圭教授、光田和伸准教授

Nichibunken Evening Seminar

第一九六回［平成二七年四月二日（木）］
発表者　ランジャナ・ムコパディヤーヤ（デリー大学准教授／日文研外国人研究員）
テーマ　Proselytizing in the "Western Paradise": Pan-Asianism to Pacifism in Nipponzan Myohoji

第一九七回［平成二七年五月七日（木）］
発表者　リチャード・トランス（オハイオ州立大学教授／日文研外国人研究員）
テーマ　Early Izumo, from the Upper Paleolithic to the Kofun Period

第一九八回［平成二七年六月四日（木）］
発表者　ガリア・トドロヴァ・ペトコヴァ・ガブロフスカ（ブルガリア国立演劇映画芸術アカデミー客員講師／日文研外来研究員）
テーマ　"Female" Presence on the Stage of the All-Male Traditional Japanese Theatre

第一九九回［平成二七年七月二日（木）］
発表者　ミシェル・モール（ハワイ大学マノア校准教授／日文研外国人研究員）
テーマ　Toward the Reexamination of Universality: Indian Inspiration for Hori Shitoku and Fellow Meiji Buddhist Clerics Opposed to Marriage

第二〇〇回［平成二七年九月三日（木）］
発表者　ケヴィン・ドーク（ジョージタウン大学教授／日文研外国人研究員）
テーマ　Reading Tanaka Kōtarō, Re-thinking Japanese Studies: Thoughts on Universalism and Particularism

学術講演会

第五九回［平成二七年六月一〇日（水）］
講演者　フレデリック・クレインス准教授
テーマ　オランダ商館長の将軍謁見

講演者　マルクス・リュッターマン准教授
テーマ　『天（あめ）は球（まる）いか平たいか』―地動説理論と佐田介石（一八一八～八二）との格闘―
司　会　稲賀繁美教授

第六〇回［平成二七年九月一〇日（木）］
【こんなものもってる日文研―日文研所蔵資料を使って―】
講演者　石上阿希特任助教
テーマ　春画を見る、艶本を読む―近世から現代まで

講演者　細川周平教授
テーマ　『松島詩子コレクション』について―戦前ジャズ・タンゴ歌手の興行
司　会　山田奨治教授

日文研・アイハウス連携フォーラム

第四回［平成二七年四月二一日（火）］
講演者　大塚英志教授
テーマ　ぼくは何故、『まんがの描き方』を海外で教えるのか

第五回［平成二七年七月一六日（木）］
講演者　瀧井一博教授
テーマ　伊藤博文を越えて、伊藤博文へ―「知の政治家」の残したもの

海外シンポジウム

［平成二七年六月三〇日（火）～七月二日（木）］
テーマ　失われた二〇年と日本研究のこれから
場　所　国際日本文化研究センター
代表者　瀧井一博教授

シンポジウム

第一二六回［平成二七年九月二六日（土）～二七日（日）］
主宰者　細川周平教授
テーマ　民謡研究の今日

会議

運営会議

第三七回　平成二七年　六月二六日（金）
第三八回　平成二七年　九月二五日（金）

調整会議

第二三一回　平成二七年　四月　一日（水）
第二三二回　平成二七年　四月一五日（水）
第二三三回　平成二七年　四月二八日（火）
第二三四回　平成二七年　五月二〇日（水）
第二三五回　平成二七年　六月　三日（水）
第二三六回　平成二七年　六月一六日（火）
第二三七回　平成二七年　七月　一日（水）
第二三八回　平成二七年　七月一五日（水）
第二三九回　平成二七年　九月　二日（水）

第二四〇回　平成二七年　九月一六日（水）

センター会議

第二三一回　平成二七年　四月　二日（木）
第二三二回　平成二七年　四月一六日（木）
第二三三回　平成二七年　五月　七日（木）
第二三四回　平成二七年　五月二一日（木）
第二三五回　平成二七年　六月　四日（木）
第二三六回　平成二七年　六月一八日（木）
第二三七回　平成二七年　七月　二日（木）
第二三八回　平成二七年　七月一六日（木）
第二三九回　平成二七年　九月　三日（木）
第二四〇回　平成二七年　九月一七日（木）

外国人来訪者

平成二六年四月一三日　トラン・クワン・ミン（ベトナム社会科学院東北アジア研究所長）他二名

海外渡航

松田利彦　教授
目　的　ロックフェラーアーカイブセンター、長老派歴史協会、アメリカ哲学協会等にて資料調査及び現地踏査
目的国　アメリカ
期　間　平成二七年四月八日～一四日

ジョン・ブリーン　教授
目　的　IKGA Austrian Academy of Sciences、ウィーン大学にて講演、Weltmuseum 等にて資料調査
目的国　オーストリア
期　間　平成二七年四月一四日～一七日

劉　建輝　教授
目　的　遼寧大学、東北師範大学にて研究打合せ
目的国　中国
期　間　平成二七年四月二〇日～二五日

坪井秀人　教授
目　的　北京日本学研究センターにて講義及び研究打合せ
目的国　中国
期　間　平成二七年五月三日～三〇日

大塚英志　教授
目　的　ヘブライ大学、テルアビブ大学にて講演
目的国　イスラエル
期　間　平成二七年五月九日～一五日

山田奨治　教授
目　的　Palais de Rumine にて学会参加及び講演
目的国　スイス
期　間　平成二七年五月二六日～六月二日

ジョン・ブリーン　教授
目　的　オスロ大学にてワークショップ参加及び研究打合せ
目的国　ノルウェー
期　間　平成二七年六月一日～五日

坪井秀人　教授
目　的　カリフォルニア大学ロサンゼルス校歴史学科にてワークショップ参加及び発表
目的国　アメリカ
期　間　平成二七年六月三日～八日

瀧井一博　教授
目　的　バイエルン州立図書館、ミュンヘン民族博物館にて資料調査、フンボルト財団にて式典及び会議参加
目的国　ドイツ
期　間　平成二七年六月七日～一三日

佐野真由子　准教授
目　的　ミラノ国際博覧会視察、ヴィクトリア&アルバート博物館にて史料調査、ハイデルベルク大学にて研究発表及び研究打合せ
目的国　イタリア、イギリス、ドイツ
期　間　平成二七年六月一五日～七月六日

大塚英志　教授
目　的　AAA言語学院にて講義、Paris-Nord Villepinte Exhibition Center にてシンポジウム参加
目的国　フランス
期　間　平成二七年六月二六日～七月六日

劉　建輝　教授
目　的　東北師範大学にてシンポジウム参加及び発表
目的国　中国
期　間　平成二七年六月二七日～七月一日

楠　綾子　准教授
目　的　ラ・トローブ大学にて学会参加及び発表
目的国　オーストラリア
期　間　平成二七年六月二九日～七月三日

ジョン・ブリーン　教授
目　的　ハイデルベルグ大学にて学会参加、発表及び情報収集
目的国　ドイツ
期　間　平成二七年七月二日～六日

ジョン・ブリーン　教授
目　的　イースト・アングリア大学、ジャパンソサエティロンドンにて講演
目的国　イギリス
期　間　平成二七年七月一四日～二九日

大塚英志　教授
目　的　Seoul Art Space Seogyo にて講演
目的国　韓国
期　間　平成二七年七月二三日～二五日

松田利彦　教授
目　的　ソウル大学校にて史料調査及びインタビュー
目的国　韓国
期　間　平成二七年八月六日～八日

坪井秀人　教授
目　的　東国大学校にて講演、戦争遺跡等見学
目的国　韓国
期　間　平成二七年八月一三日～一六日

劉　建輝　教授
目　的　中央研究院近代史研究所にてシンポジウム参加及び発表
目的国　台湾
期　間　平成二七年八月一八日～二二日

伊東貴之　教授
目　的　済南大学にてシンポジウム参加及び発表
目的国　中国
期　間　平成二七年八月二二日～二七日

榎本　渉　准教授
目　的　東北亜歴史財団、ソウル近郊にてシンポジウム参加、発表及び史跡踏査
目的国　韓国
期　間　平成二七年八月二六日～二九日

小松和彦　所長
目　的　全南大学校にてシンポジウム参加及び発表
目的国　韓国
期　間　平成二七年九月一一日～一四日

稲賀繁美　教授
目　的　ハイデルベルク大学にて学会参加及び発表
目的国　ドイツ
期　間　平成二七年九月二二日～二八日

磯前順一　教授
目　的　チューリッヒ大学にて講義
目的国　スイス
期　間　平成二七年九月二四日～二八日

稲賀繁美　教授
目　的　シドニー大学にて学会参加及び発表
目的国　オーストラリア
期　間　平成二七年九月二八日～一〇月四日

所員活動一覧（二〇一五年四月一日～九月三〇日）

荒木　浩

●著書

『夢見る日本文化のパラダイム』（編著）法藏館　二〇一五年五月　五六二頁

●論文

「『今昔物語集』成立論の環境―仏陀耶舎と慧遠の邂逅をめぐって―」東京大学国語国文学会編『國語と國文學』第九二巻第五号　二〇一五年五月特集号　三～一五頁

「日本古典文学の夢と幻視―『源氏物語』読解のために―」荒木浩編『夢見る日本文化のパラダイム』法藏館　二〇一五年五月　一三～二九頁

「編纂動機と逸話配列―紀貫之の亡児哀傷をめぐって―」『日本文学』第六四巻第七号　二〇一五年七月　二～一四頁

●その他の執筆活動

「夢と文化の読書案内」荒木浩編『夢見る日本文化のパラダイム』法藏館　二〇一五年五月　五三五～五五二頁

「書評　前田雅之著『古典論考―日本という視座』」『国文学研究』第一七六集　二〇一五年六月　五五～六〇頁

「古典の中の〈世界〉／世界の中の〈古典〉―土左日記・源氏物語・今昔物語集をめぐって―（第一五〇回記念講演から）」『あいち国文』第九号　二〇一五年九月　一～七頁

磯前順一

●論文

「近代日本の植民地主義と国民国家論――津田左右吉の国民史をめぐる言説布置」『思想』二〇一五年第七号　No. 1095　岩波書店　二〇一五年六月　一〇五～一三八頁

「天皇制国家と余白――『国家と宗教』を論じるために」『宗教研究』第八九巻第二号通巻三八三号　日本宗教学会　二〇一五年九月　三～三三頁

●その他の執筆活動

“POINT OF VIEW/ Jun’ichi Isomae: Time to form solidarity to link memories of disasters,” *The Asahi Shimbun*, March 25, 2015 (http://ajw.asahi.com/article/views/opinion/AJ201503250008).

「インタビュー　著者の肖像　『死者のざわめき　被災地信仰論』磯前順一さん」『茨城新聞』　二〇一五年五月二四日

「寄稿　死者のざわめき　耳澄ませ」『朝日新聞』（茨城版・朝刊）　二〇一五年八月一三日

「寄稿　『西成』に帰るザ・タイガース　瞳みのるさんと私たちの高度経済成長の夢」『毎日新聞』　二〇一五年八月二四日

伊東貴之

●著書

復旦大学文史研究院編『中国的日本認識・日本的中国認識』（共著）復旦文史専刊・中華書局　二〇一五年四月　一六五頁

『中國近世的思想典範』（楊際開譯・徐興慶校訂）臺灣大學出版中心　二〇一五年六月　三〇四頁

中国社会科学院歴史研究所・一般財団法人東方学会・渡邉義浩編『中国史の時代区分の現在――第六回日中学者中国古代史論壇論文集』（共著）汲古書院　二〇一五年八月　四六六頁

●論文

「関于戦後日本的中国思想史研究趨勢変化之小考―主要以島田虔次和溝口雄三為例」「綜合討論」復旦大学文史研究院編『中国的日本認識・日本的中国認識』復旦文史専刊・中華書局　二〇一五年四月　四六～五六頁、一六二～一六三頁

“Essays on Mind, Body and Human Nature: Reconsidering the Philosophical Terminology of Neo-Confucianism”『京都カンファレンス二〇一五「拡張した心を超えて：異邦の身体、人形、女の魂、東洋の精髄」予稿集』(Proceedings of the Kyoto Conference 2015 “Beyond the Extended Mind: Different Bodies, Dolls, Female Soul and Eastern Spirit”) 京都大学こころの未来研究センターこころ観プロジェクト（代表者：鎌田東二）＋科学研究費補助金・基盤研究（A）「知のエコロジカル・ターン：人間的環境回復のための生態学的現象学」（研究代表者：河野哲也）＋科学研究費補助金・基盤研究（B）「Embodied Human Science の構想と展開」（研究代表者：田中彰吾）　二〇一五年六月　一～一九頁

"Cataclysmic Disasters in Pre-modern East Asia," *The Paper Collection of the 22nd International Congress of Historical Science 2015, Jinan, China)*, August 2015, pp. 1–7.

●その他の執筆活動

「書評　未知の他者を求める文豪――野崎歓『谷崎潤一郎と異国の言語』」共同通信文化部編『書評大全』三省堂　二〇一五年四月

「コラムⅡ　夢の病因論――古代中国医学とフロイト理論の間」荒木浩編『夢みる日本文化のパラダイム』法蔵館　二〇一五年五月　四四二～四四六頁

「梗概　総合討論二：分科会Ⅱを終えて」中国社会科学院歴史研究所・一般財団法人東方学会・渡邉義浩編『中国史の時代区分の現在――第六回日中学者中国古代史論壇論文集』汲古書院　二〇一五年八月　四五六～四六一頁

稲賀繁美

●論文

「生けるイメージと文字の死相と『グローバル時代の東アジアの文化表象』から――応答にそった議論総括と方法論的反省」（前）『あいだ』二二〇号（連載第一〇九）　二〇一五年四月　一八～二二頁、（後）『あいだ』二二一号（連載第一一〇）　二〇一五年六月二〇日　五～九頁

"Do japonismo ao medievalismo: a formação da estética oriental e a crise da cultura urbana moderna,"「都市の近代化と現代文化：ブラジルと日本の対話」, *Modernização urbana e cultura contemporânea: diálogos Brasil-Japão*, Andrea Yuri Flores Urushima, Raquel Abi-Sâmara, Murilo Jardelino da Costa organização, Terracota, São Paulo 2015, pp. 69–83.

"La vie transitoire des formes—Un patrimoine culturel à l'état d'eidos flottant," *Le Sanctuaire d'Ise—Récit de la 62e Rreconstruction*, Sous la direction de Jean-Sébastien Cluzel et Nishida Masatsugu, Mardaga, 2015, pp. 145–155.

●その他の執筆活動

「『まれびと』の到来と客人歓待とのあいだ――国際研究集会『比較思想から見た仏教』でのエンリコ・フォンガロの論考を出発点に」（一）（二）『図書新聞』第三二〇一号（連載一四六）、第三二〇二号（連載一四七）　二〇一五年四月四日、一一日

「命の波立ちを幻視する　鶴岡真弓著『「装飾」の美術文明史』」「絵葉書に残る百年前の世相　細馬宏通著『絵はがきの時代』」「翻訳成功の秘密を探る　平川祐弘著『アーサー・ウェイリー「源氏物語」の翻訳者』」（再掲載）共同通信文化部編『書評大全』三省堂　二〇一五年四月九五四頁、一一八五頁、一五五九頁

「忘却された『交流誌』の空白を埋める書――広範な一次史料の精査からは、この時代ならではの豊かな人間関係の交錯が浮かび上がる　南明日香著『国境を越えた日本美術史：ジャポニスムからジャポノロジーへの交流誌　一八八〇～一九二〇』（藤原書店、二〇一五年）」『図書新聞』第三二〇六号　二〇一五年五月九日

「書評　日本統治下の多彩な文筆活動　大東和重著『台南文学』（関西学院大学出版会、二〇一五年）」『日本経済新聞』二〇一五年五月二四日

「『夢』を巡る語彙のたゆたいを――夢想の方法論的反省にむけた覚書」（上）（下）『図書新聞』第三二〇九号（連載一四八）、第三二一〇号（連載一四九）　二〇一五年六月六日、一三日

「複数言語競合のアジア」藤原書店編集部編『「アジア」を考える』藤原書店　二〇一五年六月　七八～七九頁

「中国の松本清張ブームに日中文化交流の将来を探る――王成教授講演『越境する「大衆文学」の力：なぜ中国で松本清張が流行るのか』から」（上）（下）『図書新聞』第三二一三号（連載一五〇）、第三二一四号（連載一五一）　二〇一五年七月四日、一一日

「稽古と継承」『かみはま合気道』二〇一五年度版第一七号　三重大学合気道部ＯＢ会　二〇一五年八月　四～五頁

「和辻哲郎『倫理学』の現代的課題へむけて　アントン・セヴィリアの博士論文『空の倫理学を世界の場へ――和辻哲郎の体系的倫理学の応用・限界・可能性』を起点に」（上）（中）（下）『図書新聞』第三二二〇号（連載一五二）、第三二二一号（連載一五三）、第三二二二号（連載一五四）　二〇一五年八月二九日、九月五日、一二日

井上章一

● 著書

『京都ぎらい』朝日新聞出版　二〇一五年九月　二二四頁

● その他の執筆活動

「書評　末木文美士著『草木成仏の思想』」『日本経済新聞』（夕刊）　二〇一五年四月一日
「書評　吉村豊雄著『天草四郎の正体』」『日本経済新聞』（夕刊）　二〇一五年四月二二日
「私たちの好きなアイドル　リン・ミンメイ」『中央公論』二〇一五年五月号　二〇一五年四月
「井上章一×邱海涛×金文学　日・中・韓『性の三国志』座談会」『週刊現代』　二〇一五年五月九・一六日合併号
「関西よみうり懇話会第一回　地域づくり　住民の自治力育てよ」（深尾昌峰らと）『読売新聞』　二〇一五年五月一二日
「書評　大江千里著『九番目の音を探して』」『日本経済新聞』（夕刊）　二〇一五年五月二八日
「長老経営者に取材したディテールの充実した売買春史　書評　清泉亮著『吉原まんだら　色街の女帝が駆け抜けた戦後』」『週刊ポスト』
　二〇一五年五月二九日号
「天守閣はキリスト教由来？」『高知新聞』　二〇一五年五月三〇日
「学知と世間知を往還する」近畿地区大学教育研究会編『第八三回研究協議会記録集』　二〇一五年五月
「ミュージアムで会いましょう第一回　井上章一×柳家喬太郎　かつての看板娘は、いま何処。」『文藝春秋』　二〇一五年六月号
「日本とは何なのか」（部分再録）『桃山学院大学国語入試問題』二〇一五年六月実施
「杉本秀太郎さんを悼む」『読売新聞』　二〇一五年六月二日
「書評　井上理津子著『葬送の仕事師たち』」『週刊現代』二〇一五年六月一三日号
「関西よみうり懇話会第二回　産業創出　『物語』込めものづくり」（松永桂子らと）読売新聞　二〇一五年六月一六日
「書評　臼杵勲著『東アジアの中世城郭』」『日本経済新聞』（夕刊）　二〇一五年六月一八日
「名古屋とソウルのあいだには……」『鴨東通信』No. 98　思文閣出版　二〇一五年七月
「書評　スーザン・マン著『性からよむ中国史』」『日本経済新聞』（夕刊）　二〇一五年七月九日
「限りなく全体主義的だった『戦前のアメリカ』を検証　書評　W・シヴェルブシュ著『三つの新体制　ファシズム、ナチズム、ニューディール』」
　『週刊ポスト』二〇一五年七月一七・二四日号
「書評　竹下節子著『フリーメイスン』」『日本経済新聞』（夕刊）　二〇一五年七月三〇日

「関西よみうり懇話会第三回　人づくり　都市部と人材循環」（和泉康夫らと）『読売新聞』二〇一五年八月一九日
「書評　筒井清忠編『昭和史講義』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一五年八月二〇日
「京都的な、たまらなく京都的な」『一冊の本』二〇一五年九月号　朝日新聞出版
「書評　籔内佐斗司著『壊れた仏像の声を聴く』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一五年九月一〇日
「諸勢力の利害対立の様相をエコにそくして説明　書評　フランク・ユケッター著『ナチスと自然保護』」『週刊ポスト』二〇一五年九月二五日・一〇月二日合併号

牛村　圭

●論文
「歴史認識にみるラベリング」『琅』二七号　二〇一四年一〇月　二～一三頁

●その他の執筆活動
「ある好角家の帰還」『日文研』五四号　二〇一五年三月　一九～二四頁

榎本　渉

●著書
新編森克己著作集編集委員会編『新編森克己著作集五　古代～近代日本の対外交流』（共編）勉誠出版　二〇一五年九月　五九二頁

●論文
「一三世紀の東アジア情勢と高麗・大越・日本」劉建輝編『日越交流における歴史、社会、文化の諸課題［ベトナムシンポジウム　二〇一三］』国際日本文化研究センター　二〇一五年三月　一七～二四頁
「平安末期日本対中国医学的接受」復旦大学文史研究院編『中国的日本認識　日本的中国認識』中華書局　二〇一五年四月　三～一六頁
"Trade Administrated by Maritime Trade Offices (Shibosi) in Song China and by Dazaifu in Heian Japan," *Memoirs of the Research Department of the Toyo*

大塚英志

● 著書

『アンラッキーヤングメン　クウデタア』一巻（西川聖蘭と共著）イースト・プレス　二〇一五年四月　二二七頁

『오쓰카 에이지　순문학의 죽음・오타쿠・스토리텔링을 말하다』북바이북　二〇一五年四月　一五二頁

『今、改めて「自衛隊のイラク派兵差止訴訟」判決文を読む』（川口創と共著）星海社　二〇一五年五月　三二〇頁

『多重人格探偵サイコ』二二巻（田島昭宇と共著）株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ　二〇一五年七月　一六四頁

『세계만화학원』북바이북　二〇一五年七月　四一二頁

『UNLUCKY YOUNG MEN 1』（仏語翻訳版）（藤原カムイと共著）Ki-oon　二〇一五年九月　三六二頁

● 論文

「解題」『ジブリの教科書九　耳をすませば』文藝春秋　二〇一五年四月　二一一～二三一頁

「『映画的手法』のＷＥＢ最適化実験とリミテッド・アニメ」（山路亮輔と共著）『TOBIO Critiques #1』太田出版　二〇一五年五月　四～三七頁

「研究メモ　戦時下のメディアミックス――『翼賛一家』と『カンカラ勝ちゃん』」（蔡錦佳と共著）『TOBIO Critiques #1』太田出版　二〇一五年五月　一一六～一一九頁

「解題」『ジブリの教科書一〇　もののけ姫』文藝春秋　二〇一五年七月　二五六～二七八頁

「現代のことば」『京都新聞』（夕刊）　二〇一五年八月一三日　七頁

● その他の執筆活動

「書評　貴志俊彦『日中間海底ケーブルの戦後史　国交正常化と通信の再生』」『週刊ポスト』二〇一五年四月二四日号

「もどき開口　木島日記 完結編」「怪物の民俗学」第九回『怪』vol.0044　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ　二〇一五年四月

「恋する民俗学者」（中島千晴と共著）『ComicWalker』株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ　二〇一五年四月～九月

「多重人格探偵サイコ」（田島昭宇と共著）『ヤングエース』二〇一五年五月号～一〇月号　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
「まんがでわかるまんがの歴史」第一回～六回（ひらりんと共著）『ヤングエース』二〇一五年五月号～一〇月号　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
「書評　Edited by Patrick W.Galbraith,Thiam Huat Kam and Bjorn-Ole Kamm『Debating Otaku in Contemporary Japan』（日本語版未発売）」『週刊ポスト』二〇一五年六月一九日号
「アライアズキ、今宵も小豆を洗う。」（山崎峰水と共著）『ヤングエース』二〇一五年六月号～一〇月号　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
「もどき開口　木島日記完結編」「怪物の民俗学」第一〇回『怪』vol.0045　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ　二〇一五年七月
「角川歴彦とメディアミックスの時代」第五回『最前線』　二〇一五年八月五日　星海社
「インタビュー　Dans le manga,le mouvementest roi」『Liberation』　二〇一五年八月六日　二四～二五頁
「書評　川上量生『鈴木さんにも分かるネットの未来』」『週刊ポスト』二〇一五年八月一〇日号
「アンケート回答　安全保障関連法案とその採決についてのアンケート」『早稲田文学』二〇一五年秋号　筑摩書房　二〇一五年八月　三五九～三六〇頁
「クウデタア２」（西川聖蘭と共著）『ComicWalker・大塚英志漫画』株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ　二〇一五年八月～九月

郭　南燕

● 著書

Tōhoku: Japan's Constructed Outland, Hidemichi Kawanishi, Translated by Nanyan Guo and Raquel Hill, Leiden, Boston: Brill, September 2015, 178 pages.

● 論文

「志賀直哉の夢景色」荒木浩編『夢みる日本文化のパラダイム』法蔵館　二〇一五年五月　五〇二～五二九頁

北浦寛之

● 論文

「ワイドスクリーンと日本映画の変貌―変化する撮影のスタイル」塚田幸光編『映画とテクノロジー』ミネルヴァ書房　二〇一五年四月　一五一～一七四頁

●その他の執筆活動

「テレビへの接近―東映の『一元的経営』について」『日本映画学会会報』第四三号　二〇一五年六月　二～六頁

「書評　羽鳥隆英編『寄らば斬るぞ！　新国劇と剣劇の世界』」『神戸映画資料館ウェブ・スペシャル』　二〇一五年八月

「映画『あん』とハンセン病問題」『日文研』五五号　二〇一五年九月

楠　綾子

●論文

「サンフランシスコ講和とアジア」宮城大蔵編著『戦後日本のアジア外交』ミネルヴァ書房　二〇一五年六月　四七～八〇頁

●その他の執筆活動

「安全保障法制を考える視点――国際環境を直視し、『リスクとコスト』の議論を」『新聞研究』二〇一五年八月号（No. 769）日本新聞協会　四〇～四三頁

「『安全保障の法的基盤の再構築に関する懇談会』報告書」他二〇項目『イミダス』二〇一五年度版　集英社

倉本一宏

●著書

『「旅」の誕生　平安―江戸時代の紀行文学を読む』河出書房新社　二〇一五年六月　二三二頁

●論文

「花山院の修行説話をめぐって」『白山史学』五一号　二〇一五年五月　一～二六頁

●その他の執筆活動

「白村江の戦　唐・新羅の台頭と百済滅亡」『歴史読本』二〇一五年春号　二〇一五年四月　中経出版　一〇〇～一〇七頁
「平安時代の文学と仏教（司会・編集）」黒板伸夫・永井路子編『黒板勝美の思い出と私たちの歴史研究』吉川弘文館　二〇一五年四月　八八～一六八頁
「史料・文献紹介『栄花物語』」『歴史と地理　日本史の研究』二五〇号　二〇一五年九月　二七～三二頁

フレデリック・クレインス

●著書
『日蘭関係史をよみとく　下巻―運ばれる情報と物』（編集）臨川書店　二〇一五年六月　二五六頁

●論文
「オランダ商館長と将軍謁見―野望、威信、挫折―」笠谷和比古編『徳川社会と日本の近代化』思文閣出版　二〇一五年三月　五五一～五七八頁
「オランダ商館長日記にみる西洋医術伝授」フレデリック・クレインス編『日蘭関係史をよみとく　下巻―運ばれる情報と物』臨川書店　二〇一五年六月　一九～五四頁

小松和彦

●著書
『大人の探検　妖怪　ＹＯＫＡＩ』（監修）実業之日本社　二〇一五年五月　一九二頁
『知識ゼロからの妖怪入門』幻冬舎　二〇一五年七月　一二七頁
『異界と日本人』株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ　二〇一五年七月　二一〇頁
『京都魔界地図帖』（監修）宝島社　二〇一五年七月　一一一頁
『決定版　日本の妖怪』（飯倉義之と共同監修）宝島社　二〇一五年九月　一二七頁

●その他の執筆活動

「特集こころ—What & How　妖怪—自分の心を写す”鏡“」『ＭＯＫＵ』二〇一五年四月号　ＭＯＫＵ出版株式会社、二〇一五年四月
「芸能の鬼の魅力」『第一二六回民俗芸能公演　東日本大震災復興支援　東北の芸能Ⅳ　みちのくのオニ』独立行政法人日本芸術文化振興会国立劇場　二〇一五年四月
「第九回首都大学東京図書館本館主催講演会『研究は世界を広げる～越境する妖怪～』レポート　講師　小松和彦氏」（講演録）『りべる』No. 128　首都大学東京図書館　二〇一五年四月
「インタビュー　京ものがたり　伏見稲荷大社『妖怪博士』が語る」『朝日新聞』（夕刊）　六月二三日
「特別企画　大人も子どもも楽しめる！妖怪入門」（監修）『ＰＨＰ』二〇一五年八月号（通巻八〇七号）株式会社ＰＨＰ研究所　二〇一五年七月
「森の神殺しとその呪い」『ジブリの教科書一〇　もののけ姫』文藝春秋　二〇一五年七月
「小松和彦インタビュー　魔都への誘い—もうひとつの京都」『京都魔界地図帖』宝島社　二〇一五年七月
「妖怪がいない妖怪ウォッチ」『文藝春秋』二〇一五年八月号　文藝春秋　二〇一五年八月
「インタビュー　妖怪はなぜ生まれたのか？—日本の妖怪文化をたどる—」『月刊京都』二〇一五年八月号（七六九号）白川書院　二〇一五年八月一日
「インタビュー　ニュースを読み解く　掲示板の視点『人文系学問の未来』」『京都新聞』　二〇一五年八月一日
「ソフィア京都新聞文化会議四六四　小松和彦氏　慰霊という現代の記憶装置」『京都新聞』　二〇一五年八月七日
「人間学としての妖怪学を求めて」『本』八月号　講談社　二〇一五年八月
「解説　よみがえる草双紙の化物たち」『江戸化物草紙』（角川ソフィア文庫）株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ　二〇一五年八月
「妖怪対談」（飯倉義之と）小松和彦・飯倉義之監修『決定版　日本の妖怪』宝島社　二〇一五年九月

佐野真由子

●その他の執筆活動

「これまでの万博、これからの万博」（座談、中牧弘允・石川敦子と）『鴨東通信』No. 99　二〇一五年九月　二～七頁

「万博の人びと」同右、八～九頁

瀧井一博

●その他の執筆活動

「政治学の古典を読む（一一）民主主義の世界観　ハンス・ケルゼン著（長尾龍一・植田俊太郎訳）『民主主義の本質と価値』岩波文庫二〇一五年」『究』五月号（通巻第五〇号）ミネルヴァ書房　四四～四五頁

「明治憲法の成立とドイツの影響」国立歴史民俗博物館編『図録　ドイツと日本を結ぶもの―日独修好一五〇年の歴史―』二〇一五年七月　八六頁

「日本の国家構造を人体に模して説明した図」「大日本帝国憲法（明治憲法）」「憲法発布式桜田之景」（キャプション解説）国立歴史民俗博物館編『図録　ドイツと日本を結ぶもの―日独修好一五〇年の歴史―』二〇一五年七月　八四～八五頁

「政治学の古典を読む（一二）政治を見るクリオの眼　高坂正堯『文明が衰亡するとき』新潮社　一九八一年」『究』八月号（通巻第五三号）ミネルヴァ書房　四四～四五頁

ジョン・ブリーン

●著書

『神都物語―伊勢神宮の近現代史　歴史文化ライブラリー四〇五』吉川弘文館　二〇一五年六月　一九二頁

●論文

「神苑会と宇治山田：近代的聖地の形成をめぐって」『瑞垣』二三一号　二〇一五年　三九～五六頁

●その他の執筆活動

「現代の言葉　アムネスティ」『京都新聞』（夕刊）二〇一五年五月二六日

「伊勢神宮の公共性」『本郷』第一一八号　吉川弘文館　二〇一五年七月　一八～二〇頁

細川周平

●論文

“A literature moderna dos imigrantes japoneses nos folhetins de journais entre 1920 e 1930,” Andrea Yuri Flores Urushima, Raquel Abi-Sâmara & Murilo Jardelino da Costa (eds.), *Modernização urbana e Cultura Contemporânea: Diálogos Brasil-Japão*, Terracosta, São Paulo, 2015, pp. 43–68 (translation by Yuko Takeda P. de Arruda).

●その他の執筆活動

「室伏鴻さんを送る」『〈外〉へ！〈交通〉へ！　ありがとう　室伏鴻！』「ありがとう　室伏鴻！」実行委員会　二〇一五年八月　五一～五四頁

松田利彦

●著書

『東亜聯盟運動と朝鮮・朝鮮人―日中戦争期における植民地帝国日本の断面』有志舎　二〇一五年六月　二四〇頁

●論文

「一九一〇年代における朝鮮総督府の国境警備政策」『人文学報』第一〇六号　二〇一五年四月　五三～七九頁

山田奨治

●著書

『東京ブギウギと鈴木大拙』人文書院　二〇一五年四月　二五〇頁

●その他の執筆活動

「武道の可能性を探る：第七四回　わたしにとっての弓道」『月刊武道』二〇一五年五月号

「インタビュー　著者に会いたい　不肖の息子と偉大な父の物語」『朝日新聞』　二〇一五年五月一〇日

「インタビュー　型破りな息子との関係研究　人間的側面　浮き彫りに」『毎日新聞』（京都版）　二〇一五年五月二六日

「インタビュー　大拙　息子へ悟りと慈悲　書簡・日記に揺れる親心」『讀賣新聞』（大阪本社版・夕刊）　二〇一五年六月二四日
「インタビュー　巨人に近づく入り口になれば」『西日本新聞』　二〇一五年七月一二日
「五輪エンブレム　問題どこに　類似許さぬ現代社会」『毎日新聞』　二〇一五年九月四日
「コメント　横行するコピペ文化　五輪エンブレム騒動から考えた」『東京新聞』　二〇一五年九月四日
「いまの社会を変えられるのは誰か」『ポリタス』　二〇一五年九月二八日
「図書館とデータベースの経済効果」『日文研』五五号　国際日本文化研究センター　二〇一五年九月

マルクス・リュッターマン

●著書

（共編）*Japonica Humboldtiana* vol. 17 (2014–15), Wiesbaden: Harrassowitz, September 2015.

劉　建輝

●論文

「竹内好対近現代中国的認識及其影響」復旦大学文史研究院編『中国的日本認識・日本的中国認識』中華書局　二〇一五年四月

●その他の執筆活動

「インタビュー　『絵』が語る旧満洲政策―帝国膨張と『宣伝』読み解く」『京都新聞』（夕刊）　二〇一五年七月二二日

日文研　五十六号

二〇一六（平成二八）年三月三一日発行

編　集　倉本一宏、佐野真由子、竹谷直子

発　行　大学共同利用機関法人　人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所　〒610-1192　京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話　（〇七五）三三五―二二二二

ホームページ　http://www.nichibun.ac.jp

印刷　中西印刷株式会社

NICHIBUNKEN

ISSN 0915-0889